

う

う 鵜(名)

喉音にして單母音の一つ。
鳥の名。鵜に似たる鳥にて水邊に住みよく
結なごを捕ふるもの。

う 兎(名)

うさぎに同じ。

う 卯(名)

十二支の一つ。……卯の時は午前六時。卯
の方角は眞東。

う 羽(名)

音樂の調子。五音の一つ。

う 右(名)

「一」みぎ。「二」舞樂にいふ詞。右方の畧。
殿堂なごを數ふる詞。○「一」宇の伽藍」

う 宇(名)

「一」否の反對。●諸。●うん。○萬葉「い
なもうも欲りするまゝにゆるすべきかたち
見ゆかも我もよりなむ」「二」うめく聲。○

う 得(他動下二段)

宇治「うさいひて後様にこそ臥したりけれ」
に叶ふ。●能ふ。●できる。

う い

「一」所有とする。●もらふ。「二」我力
はころもに同じ。

う め

羽衣(名) 有爲(名)
三界を經廻りくする事。●輪廻。●
常に變化しつゝ定め無き世。●無常。○堀
川「有爲の世は今日か明日かの鐘の音をあ

う ひ 初(形)

はれいつまで聞かんぞすらん」(佛教)

う めらう

最初の。●新しき。●若き。●初心の。
外郎(名) 相州小田原にて賣る丸藥の名。一
名は透頂香。

う ひばな

初花(名) はつばなに同じ。(貫之集)

う ひちん

初陣(名) 初めての出陣。

う ひたつ

初立(自動四段) 初めて立つ。●初めて出立
する。○好忠集「時鳥うひだつ山をささ知
らば木の間を行きて聞くべきものを」夫木
「いつしかもうひだちにける霞かなまだい
さけなき春のはじめに」

う ひうひし

初々し(形。形狀言シク活) 物なれぬ有
様。●初心らしい。●未熟らしい。

う ひまなび

初學(名) 「一」未熟の學問。●初學。「二」
學び始むる事。●就學。

う ひご

初子(名) 初めて生みたる子。●はつご。

う ひご

初事(名) うひくしき所樂。●未熟の所爲。

う ひご

初琴(名) 習ひ始めの琴。(源氏)

う ひか

初冠(名) 冠の着初。●元服。

う ひてんべん

有爲轉變(名) 有爲に同じ。(佛教)

うひいざん

初産(名) 初めての出産。

うゐき^{キヨウ}

茴香(名) 草の名。實は藥または香に作るもの。

うろ

雨露(名) 雨と露と。

うろ

有漏(名) 煩惱ある衆生の身。●佛ならざる凡夫。

○新勅撰「有漏の身の假の菖蒲の草枕此世は夢の旅ぞかなしき」(佛敎)

うろ

(名) うつろに同じ。空洞。

うろめく

(他動四段) 間を抜き取る。

うろおぼえ

(名) 不安心なる記憶。●おぼろに覺え居る事。

うろたゆ

(自動下二段) あわてる。●狼狽する。

うろつく

(自動四段) 迷ひあるく。●まごつく。

うろん

胡亂(名) 疑はしき事。●不審なる事。●怪しき事。(形)―胡亂の。(副)―胡亂に。

うろろ

(副) 途方に迷ふ有様。●まごつく有様。(又)

―うろくそ。

うろくづ

鱗(名) いろくづに同じ。「一」うろこ。「二」

魚類。

うろこ

鱗(名) 「一」魚の外皮に附きてある丸く小さき

もの。●こけ。●うろくづ。●いろこ。「二」

うろこがた

うろこがたの略。 鱗形(名) 摸様の名。三角形を多く重ねたるもの。

うば

乳母(名) 小兒に乳吞ます役の女。●めのと。

うば

姥(名) 「一」祖母。○宇治「妻のうば」「二」年老いたる女。●嫗。○「尉と姥

「三」能面の名。老女に用ふるもの。(圖)

うばい

優婆夷(名) 佛教信徒にして俗

體なる女。

うばたまり

(名) 姥專女の轉。老女。○催馬樂「此殿

うばたまの

の奥の酒屋のうばたまり我を戀ふらし」 烏羽玉の(枕) 黑夜暗などの枕詞。うば

たまのが轉じたる詞。

うばそく

優婆塞(名) 佛教信徒にして俗體の男。

うばつ

有髮(名) 頭の髪のある事。……剃髮に對して

云ふ。

うばら

棘。茨(名) いばらに同じ。●薔薇に同じ。

うばらぐつわ

(名) 響の一種。唐鞍に用ふるもの。(和

名抄)

うばふ

奪(名) 強ひて取り去る。●強奪する。●ば



ひさる。●盗む。

うばぎ

蒿(名) 草の名。嫁菜の古名。おはぎに同じ。

(萬葉)

うばめ

乳母女(名) うば。●めのこ。(山家集)

うに

海膽。雲丹(名) 海産動物の名。紫色にして栗のいがの形したるもの。其腸は鹽辛さして食ふべし。

うぼんさい

孟盆齋(名) 孟蘭盆に同じ。

うはう

右方(名) 高麗樂の稱。○舞樂の時は樂屋の右の方に其樂人着座する故に云ふ。之に反して唐樂をば左方と呼ぶ。

うべ

宜(名) 尤至極。●道理。△(形)―うべなる。

うべ

郁子(名) むべに同じ。

うべ

宜(副) なるほど。●いかにも。●道理で。○拾遺「歸りにし雁ぞ鳴くなるうべ人ばうき世の中を背きかゝらん」後撰「一年に二たび咲かね花なればうべ散る事を人厭ひけり」

うべなむ

(自動四段) うべなふに同じ。○續紀宣命「天地のうべなみ許して」

うべなふ

(他動四段) 承諾する。●うけがふ。

うべなうべな

(副) いかにも。●なるほど。

うべうべし

(古) 宜々し(形。形狀言シク活) さもあるべし。

うべし

(副) うべに同じ。いかにも。●なるほど。(古)

うべしこそ

(副) うべに同じ。いかにも道理で。○伊勢「是や此天の羽衣うべしこそ君が御けしに奉りけれ」

うど

獨活(名) 草の名。春古根より出づる芽生を食用とするもの。

うどほま

有度濱(名) 神樂歌の一種。東遊の中の曲名。

うどねり

○定家「ふる袖はみたらし川に影見えて空にぞすめるうどほまの聲」

うどん

内舍人(同) 中務省の官吏。帶劍にて禁中を守護し行幸の時前後に供奉する役。多くは殿上の童之に任ぜらる。

うどむ

饅頭(名) 食品の名。うんごんの略。

うどむ

疎(他動下二段) 疎ましむる。●疎んずる。疎(他動四段) 遠ざくる。●疎遠にする。●忌み嫌ふ。

うどんぐ

(名) うどんげに同じ。(源氏)

うどんげ

優曇華(名) 三千年に一度花咲くといふ想像

の植物。優曇鉢華とも優曇鉢樹とも名づくるもの。此花の開くるは轉輪王出世の瑞兆なりと云ふ。(佛教)

うとんす

疎(他動サ變) 疎くする。●疎む。

うとう

善知鳥(名) 水鳥の名。形鵲に似て嘴の上に赤

色の肉角あり。頭は鵲の如し。陸奥の外が濱に住む。

うとんと

(副) 半は眠り半は覺めたる有様。(又)ーう

さくさ。

うとんとし

疎々し(形。形狀言シク活) 疎くなる有様。

●疎遠な。

うとややかた

善知鳥(名) 水鳥の名。うさうに同

じ。新撰歌枕に曰く「外の濱といふ處にうさうやかたと云ふ鳥の侍るが。此濱の砂子の中に隠して子を生み置けるを。獵師母のうさうがまねをして。うさうくミ呼べば。やかたさて這ひ出づるを取るぞと申す。其時母鳥來りてあなたこなたへつきありき鳴くなり。其涙の血の濃き紅なるが雨の如く降るなり。云々。取る人此血にかゝらじさて蓑笠を着るなりといへり」

うとく

有徳(形) 「一」徳行の高き事。「二」富みたる事。

●有福。

うとまじ

疎(形。形狀言シク活) 疎むべき有様。

うとし

疎(形。形狀言ク活) 親しみの少なき。●疎遠

な。●交の遠くなりたる。

うち

内(名)

「一」なづ。●あひだ。●内部。「二」家。

うち

氏(名)

●宅。「三」内裏。●御所。「四」天皇陛下。「一」朝廷より賜はりたる其家の族名。平源、藤原、清原の類。「二」苗字。新田、足利、織田、徳川の類。「三」他人の姓名の下に附けて輕き敬語に用ふ。殿くらぬの意。

うちいり

打入(名) 攻め込む事。●襲撃。

うちいはひ

内祝(名) 家内のみにてする祝儀。

うちいづ

打出(他動下二段) 「一」出だす。「二」發聲する。●吟詠する。

うちんぎ

内論義(名) 古へ禁中にて正月に行はれし

御齋會の結願の日御前にてする經文の論議。(水鏡)

うちはたす

討果(他動四段) 打殺す。●殺害する。

うちばらひ

打拂(名) 塵拂。

うちばやし

(形。形狀言ク活) いちばやしに同じ。●最

うちへ^エ

早し。●最初の。(續紀宣命)
(副) 永く。●久しく。●引き續きて。○枕
「うちへ雨の降る頃」

うちへて

(副) 永く。●久しく。●引き續きて。○
後撰「うちへて春はさばかりのどけきを
花の心や何いそぐらん」

うちし

打橋(名) 入用の時假に掛けて平生は取除き
置かるゝやうに作りたる橋。廊下つきの
通路などに之を用ふ。

うち

(副) 間に。●程に。

うち

内外(名) 内と外と。●内外。

うちり

内取(名) 禁中にて相撲節會の前に行はるゝ
下演習。七月二十六日を定例とせり。

うちど

打殿(名) 装束衣類を打つ所。(源氏)

うちどのかみ

内外神(名) 伊勢の内宮外宮。

うちどのふみ

内外書(名) 佛書と儒書と。

うちどのみや

内外宮(名) 伊勢の内宮外宮。

うちどく

打解(自動下二段) 心の解け弛む。●安心す
る。●深く親しむ。

うちどめ

打留(名) 事の終り。●終局。

うちちがひ

打違(名) 十の字を斜に見たる形。●交叉。

うちを

打緒(名) 打紐。●組紐。

うちわ

(名) 「一」家族の間。●家内。「二」内部の事情。
●内情。●内幕。●秘密。

うちば

團扇(名) 「一」扇に似て圓形なるもの。「二」軍
配團扇。「三」唐團扇。「四」相撲の行司の手
に取るもの。形は唐團扇に同じ。

うちわた

打綿(名) 綿弓にて打ちたる綿。……綿綿に
對して。

うちばだいこ

團扇太鼓(名) 携へて打鳴らすに便なる
爲め柄を附けて團扇の如く造りたる太鼓。
法華宗の信徒の題目を唱ふる時に用ふるも
の。

うちわたし

(副) 通例に。●一般に。●おしなべて。

うちわたす

○源氏「うちわたし世にゆるしなき關川を
みなれそめげん名こそをしけれ」
打渡(他動四段) 「一」渡す。「二」見わたす。

うちわ

●ながめやる。(萬葉)

うちわひ

内譯(名) 總體の内の小別。

うちがひに

(名) 打ち違ひに。(新六帖)

うちかた

内方(名) 他人の妻の尊稱。●内儀。●令聞。

うちがたな

打刀(名) 武士の腰に帶ぶる刀。鏢あるも

の。

うちがね

打金(名) 鉄砲の名所。引き金を引けば落ち

て雷管を打ち發火せしむるもの。

うちかけ

打懸。稱襪(名) 「(一)上古武官の大禮服。袖な

くして胸と脊に懸くるもの。(二)舞樂・競

馬などの服。陵王などの舞人の胸より脊に

懸けたるもの。(三)近世婦人の服。帶を結

びたる上に長く打ち掛けて着るもの。●か

いざり。

うちかけよろひ

挂甲(名) 鎧の一種。上古武官の大禮

の時に着せしもの。(延喜式)

うちかぶと

内兜(名) 兜の内面。

うちかへす

(他動四段) 繰返す。

うちがみ

打紙(名) 木槌にて打ちたる紙。

うちがみ

氏神(名) 「(一)其氏の祖先の神靈。(二)轄じ

て其土地鎮守の神。●産土の神。

うち

有頂(名) 有頂天の畧。○謠曲「上は有頂

の雲を分け」

うちてん

有頂天(名) 「(一)佛教にて云ふ天界の

一つ。(二)萬事を忘れて心の浮かる。事。

●うつゝを抜かず事。

うちよする

(枕) 駿河の枕詞。海岸の國なれば波の打

よするこいふするの音を重れて云へるなる

べし。(萬葉)

うちたぢ

打太刀(名) うちがたなに同じ。

うちたなり

(枕) 多武(大和地名)の枕詞。折れ搦むと

掛かる意にや。○萬葉「うちたなりたむの

山霧しげきかも細谷川に波のさわげる」

うちたれがみ

打垂髪(名) 結ばずに垂らしたる髪。昔

の女および小兒の普通の髪。○新千載「谷川

の岩根かたしく青柳のうちたれがみを洗ふ

白波」

うちたて

打立(名) 今の衝立の類。(落窪)

うちそな

打麻を(枕) 麻績(人名)の枕詞。麻の文字を

重れて云ふ。(萬葉)

うちつくに

内國(名) 「(一)畿内五ヶ國。(二)我國。

うちつけ

打付(名) 直に其事を言ひ又は直に其人に接

する事。●直接。●卒爾。△(形) 打付の。

(副) 打付に。

うちつゑ

打杖(名) 能樂道

具の一種。鬼、蛇

龍などの手に持つ短杖。敵を攻め打つ用

うちつみや

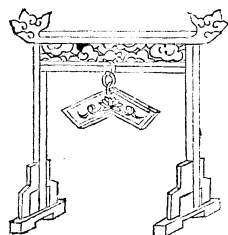
のもの。(圖)
内宮(名) 禁中にて皇后などおはします御所。

うちね

打根(名) 武器の名。敵に手もて投げ付くる矢の根。

うちならし
うちならし

内習(名) 内々の演習。●下稽古。(源氏)
打鳴(名) 樂器の名。石または金屬にてへの字形に作り懸けて打鳴らすやうにしたるもの。●



うちならし
うちなびく

(名) うちまきに同じ。
打靡(枕) 「一」草、髪、柳の枕詞。その形容詞より起れるなり。「二」春の枕詞。春は若草、柳などの靡く頃なれば續けたるなり。

うちうち

内々(名) 「一」ないないに同じ。「二」家族又は親しき親族のみの間。●うちわ。

うちうみ
うちのぼる

内海(名) 湖。●瀬戸内の海。
(枕) 佐保(大和地名)の枕詞。(萬葉)

うちのとねり

内舍人(名) うとねりに同じ。

うちのちやうじや

氏長者(名) 其氏の統領。後には王氏、源氏、藤原氏、橘氏に限りて朝廷より之を賜はる事なれり。

うちのおとど

内大臣(名) ないだいじん。

うちのおほのみ

内大臣(名) ないだいじん。

うちのなさ

氏長者(名) 氏の長者。

うちのかみ

氏上(名) 氏の長者。

うちのかみ

氏神(名) うちがみに同じ。

うちのかしはでのつかさ

内膳司(名) ないぜんし。

うちのたくみのつかさ

内匠寮(名) たくみれう。(和名抄)

うちのそめものつかさ

内染司(名) ないせんし。(和名抄)

うちのくらのつかさ

内藏寮(名) くられう。(和名抄)

うちのみに

内親王(名) ないしんわう。

うちのしるすつかさ

内記(名) ないき。(和名抄)

うちのしん

氏神(名) うちがみに同じ。

うちぐもり

内曇(名) 「一」紙の名。鳥の子の一種。上に青、下に紫の雲形を漉き出したるもの。裁ちて短冊などに用ふ。「二」底に黒き色のあ

る土器。

うちやる

打遣(他動四段) 捨て置く。●放擲する。

うちやしる

氏社(名) 氏神を祭りたる社。

うちまわり

内参(名) 内裡に参る事。●参内。

うちまかせては

(副) 大方一通りにては。●通例では。

●なみ／＼の事では。○古事談「京中の大路をもかく籠作にやま申さしめ給ひければ。うちまかせては有るべからざる事なれども我等がせんば誰かは告むべきやま仰せられけり」△(形)―うちまかせたる。

うちまかす

打任(他動下二段) 丸で委任する。●一任する。

うちまた

内戻(名) 喉の内側。
たゝまつ

うちまつ

打松(名) 松明(源氏)

うちまつり

氏祭(名) 氏神の祭禮。

うちまく

内幕(名) 内部の事情。●内情。●情實。●秘密。

うちまき

打撒(名) 陰陽師などの神を祭る時打ち撒く米。●轉じてはなゝ米。●うちならし。

うちけし

打消(名) 「一」消す事。「二」文法上の詞。動詞の意味を裏に返らしむるすゝめ、ね、さる。

うちぶどころ

内懷(名) 着物の下前の内側。

うちぶみ

氏文(名) 其家の由來書。●先祖の歴史。●系圖。

うちこ

氏子(名) 「一」氏神に對して其祭祀を行ふべき子孫。「二」産土神の配下に住む人民。

うちえする

(枕) うすよするに同じ。(萬葉東歌)

うちて

討手(名) うつてに同じ。

うちで

打出(名) 古(禁中にて儀式のある時。女官の装束を簾より下に顯はし出たす事。

うちでら

氏寺(名) 其氏の繁榮を祈る爲に建立したる寺。藤原氏の建立せし興福寺の類。

うちでのこづち

打出小槌(名) 種々無量の寶物を打ち出だす効能のある槌。大黒天の手に持ち居給ふもの。

うちでし

内弟子(名) 師の家に寄宿する弟子。●塾生。

うちあひひ

打合(名) 打ち合ふ事。●叩き合ひ。●争鬭

うちあは

(形) 有る。(雅)

うちあはび

打鮑(名) 乾して打ちのばしたる鮑。祝儀の肴に用ふるもの。●熨斗鮑。●長鮑。

うちあは

打合(他動四段) 相互に打つ。●叩き合ふ。

うちあふ

打合(他動四段) 相互に打つ。●叩き合ふ。

● なぐりあふ。

うちあく

打明(他動下二段) 事情を委しく述べてい

ふ。

うちあぐ

打上(他動下二段) 「一」拍手する。「二」酒宴

する。(雅)

うちあぐる

(統) うちのぼるに同じ。(萬葉)

うちあけ

打上(名) うたげに同じ。酒宴。(古)

うちき

褂(名) 男女装束下の上衣。大褂、小褂の二種

あり。

うちき

内氣(名) 扣目なる性質。

うちき

打木(名) 酒を搾る道具。

うちぎぬ

打衣(名) 女装束の一つ。單の上、五衣の下に

着るもの。◎砧にて打ちて光を出だし作れる故の名。

うちぎね

打杵(名) 杵に同じ。

うちきらす

(自動四段) 空が眞暗になる。○萬代「霞

みつゝ空うちきらしこきたれて花の散るこゝと泡雪を降る」

うちきのひさ

柑人(名) 天皇の御髪を梳りなどする役

の人。藏人之を勤む。……藏人私記に曰く「御髻御髪之事。侍臣の間。事に堪へたる人

を撰ぶ。共に定例なし。皆當色の袍を着す。

之を御褂みえといふ。紫色の絹を染むるなり。

藏人所に納む」○源氏「上は御うちきの人

めして」

うちきき

打聞(名) 「一」聞く事。「二」聞きたる儘の筆

記。●聞書。

うちなチュウ

宇宙(名) 天地間。

うちゅうべん

右中辨(名) 辨を見よ。

うちめ

打目(名) 装束衣服にあらはれたる槌の跡。

(源氏)

うちみ

打身(名) 打ち傷の痛み。

うちみだりのぼこ

打亂篋(名) 「一」手拭などを入れる、

箱。(和名抄)「二」化粧道具を入れる箱。(源氏)

うちみつ

打水(名) 夏の頃など地を濡らす爲に撒く

水。

うちじに

討死(名) 戦死。

うちしき

打敷(名) 絹綾、綿などにて作れる器物また

は佛壇などの敷物。

うちび

打火(名) 火打にて打ち出す火。●切火。

うちびど

氏人(名) 「一」其氏の人。「二」氏子。

うちひさす

(枕) うちひさすに同じ。(萬葉)

うちひさす

内日刺(枕) 宮都の枕詞。「美し日さす宮」

うちひも

打紐(名) 糸を組み合はせて作りたる紐。

うちもの

打物(名) 「一」武器の名。刀、太刀、鎗、長刀の

總稱。「二」徳川時代。大名の行列には特に長刀をいふ。「三」砧にて打ちて光澤を出だしたる織物又其衣類。「四」撥にて打ち鳴らす

雅樂の樂器。太鼓、鉦鼓、羯鼓の類。「五」菓子

の名。型に入れて花の形などに作りたる落麩。

うちもも

内股(名) 股の内側。

うちすみ

内住(名) 内裡に住む事。●宮仕に出づる事。

うり

(雅) 蔓草の名。其實は丸きも細長きもありて大方食用となるもの。

うりはらふ

賣拂(他動四段) 賣る。

うりぬし

賣主(名) 家屋敷などを賣る人。

うりだし

賣出(名) 賣り初むる事。

うりだす

賣出(他動四段) 賣り初むる。●發賣する。

うりつくり

瓜作(名) 瓜を作る農夫。(催馬樂)

うりん

羽林(名) 左右近衛および大、中、少將の異名。

うりんけ

羽林家(名) 羽林に昇進すべき公卿の家族。

うりや

賣家(名) 賣るべき家。●賣家。

うりまろび

瓜轉(名) 瓜のころぶやうにころげまはる事。喜のあまりにする所爲。○輔親集「ふくはしのけふより見ゆる身にしあれば瓜まろびしてよろこびぞする」

うりこ

賣子(名) 商家に雇はれて市中を賣り歩く人。

うりて

賣手(名) 賣る人。

うりわぐ

賣揚(他動下二段) 品物を賣りて代金を收むる。

うりさばく

賣捌(他動四段) 賣る。●販賣する。

うりきる

賣切(他動四段) 賣りて仕舞ふ。

うりもの

賣物(名) 賣買すべき品物。

うりもみ

瓜揉(名) 食品の名。瓜を刻み酢を加へたるもの。

うりすゑ

賣据(名) 建物など其場に据ゑたる儘にて賣る事。

うめ

(代) 人を卑しめて呼ぶ詞。●きさま。

うめぼれ

自惚(名) 自分のみをわらひものと思ひ居る事。

うめぼれ

事。

うる 賣(他動四段) 代價を得て品物を與ふる。●鬻ぐ。

●販賣する。●賣捌く。●賣却する。

うるひ 閏(名) 「一」うるほひ。「二」うるふ。●閏年。●閏月。

うるち 粳(名) 糯に對して普通の米をいふ。

うるりこ 細魚(名) 小魚の名。(和名抄)

うるほひ 潤(名) 潤はふ事。●利潤。

うるほふ 潤(自動四段) 「一」水分を含む。●濕氣を持つ。●「二」利潤を得る。

うるほす 潤(他動四段) 「一」潤ははしむる。●しめらする。●「二」恩を受けしむる。●利を得さする。

うるほし 麗(形。形狀言シク活) 「一」立派な。●行儀正しき。●「二」美し。●「三」中のよき。

うるはしむ (他動四段) 中よくする。●雅(名) 鮎の鹽辛。

うるか (自動四段) 潤ひ濡る。●濡れて見ゆる。

うるむ 閏(名) 曆の詞。太陽曆にては四年目毎に二月

廿八日の次にある一日の餘日。太陰曆にて

は凡そ五年間に來る一ヶ月の餘日。

うるふ 潤(自動四段) うるほふ。

うるふ 潤(自動二段) 潤ははしむる。●うるほす。

うるふッどし 閏年(名) 曆にて閏のある年。

うるふッき 閏月(名) 太陰曆にて閏として割り出されたる月。

うるま 宇留麻(名) 琉球の島名。○千載「おぼつかな

うるまの島の人なれや我恨むるを知らずがほなる」

うるさし (形。形狀言ク活) 「一」煩はし。●厭ふべし。●「二」うるせしに同じ。

うるめ (名) 魚の名。鰯の一種。

うるし 漆(名) 「一」木の名。葉は軍勝木に似て秋紅葉するもの。●「二」漆の木より出づる脂を取りて製したる塗料。

うるしね 粳稻(名) 米の一種。●うるちに同じ。

うるしゑ 漆繪(名) 紙又は板なごに漆にてかきたる繪。

うるせし (形。形狀言ク活) かしこし。●さかし。●ねらい。●巧者な。○宇治「此童も心得てけり。うるせきやつぞかし」

うる 魚(名) 尾鰭ありて水中に住む動物の總名。●い

な。●さかな。●魚類。

うゐ 魚店(名) 魚を賣る家。●魚屋。

うゐだな

うわ^ナうさわ^ナう

右往左往(句) 右に行き左に行き人々

の繁く往來するを云ふ。

うなぐし

魚串(名) 魚を焼くに用ふる串。

うは^ワ

上(形) 上の。●上にある。●上の方の。●上側の。

●表の。○「上唇」「上帯」「上前」

うは^ワば

上齒(名) 上顎より生じたる齒。

うは^ワばみ

鱗(名) 蛇の大きくして人をも呑む程のもの。●大蛇。

うは^ワに

上荷(名) 馬一駄の上に附け加ふる荷物。

うは^ワべ

(名) 外部。●表面。●外面。

うは^ワぬり

上塗(名) 物の表面を塗る事。

うわる

植(自動四段) 植ゑてある。

うは^ワな

(名) 先夫に離れて後に持ちたる夫。●後添。

(和名抄)

うは^ワなり

上折(名) 上の端を折りて着る兜下の烏帽

子。(保元)

うは^ワおほひ

上覆(名) 物の外面を覆ふ物。

うは^ワおそひ

上襲(名) 衣類の上に覆ひ着る衣。うちかけ

の類。(枕)

うは^ワおび

上帯(名) 鎧の上に結ぶ帯。

うは^ワかは^ワ

上皮(名) 「一」一番外面の皮。●外皮。●

うは^ワがき

表皮。(二)表面の部分。●うはつら。●外面。

うは^ワがすみ

表書(名) 書物、帳簿、書狀などの表面に文字を記す事。又其文字。

うは^ワがすみ

上霞(名) うはべに立つ薄霞。○拾玉集、住

吉の松の梢のうはがすみこそわりすぎる春の色かな」

うは^ワざうり

上草履(名) 家の内にて用ふる草履。

うは^ワぞめ

上染(名) 染め上ぐる事。

うは^ワなり

後妻(名) こうさい。●後ぞひ。(古)

うは^ワなりうち

後妻打(名) 足利時代より徳川初世の頃まで行はれたる風俗。男の前妻を離別して

後妻を娶りし時。離別せられし前妻が親類

の女人なごさかたらひ襲ひ來て新婦を打擲

する事。

うは^ワなだら

(名) 外面の平らに見ゆる事。

うは^ワなみ

上波(名) 表面に立つ波。○萬代「入海の瀬

戸のさきなる高岩にうはなみ越えて荒る、

沙風」

うは^ワむしろ

上庭(名) 室内に敷く庭。

うは^ワうは^ワ

(副) 心の落ち付かぬ有様。

うは^ワのり

上乘(名) 船の積荷を監督する爲に乗り込む事。又は其人。

うは^ワのそら

上空(名) 「一」虚空。「二」心のうかれ居る事。「三」實證なき空言。

うは^ワぐもる

上曇(自動四段) うはべに少し雲のかる
○今昔「月少しうはぐもりて」

うは^ワまへ

上前(名) 衣類の前を合せて上になる方の稱。

うは^ワげ

上毛(名) 鳥獸などの表面の毛。○夫木「五月雨のひまなき頃も小男鹿の上毛の星は曇らざりけり」

うは^ワぶみ

表文(名) 上書の文字。●外題。●表題。

うは^ワこご

浮言(名) 病の爲に精神亂れて口走る言語。

うは^ワこほり

上氷(名) うはべにむすぶ薄氷。○重之集「うはこほり解くるなるべし山陰の石間の清水音まざるなり」

うは^ワゑ

上繪(名) 模様、紋などを染め出だして後。其上を更に筆にて書く事。

うは^ワて

上手(名) 上の方。

うは^ワわこ

上顎(名) 顎の上半部。●じゃうぐく。

うは^ワさ

噂(名) 陰にてする評判。●風説。●風聞。●

うは^ワざし

風評。

上差(名) 「一」箆に矢を差したる上に更に鏑

矢もしくは雁腿を差し添ふる事。「二」狩衣などの袖の袖括の處を組糸の類にて縫ふ事。

うは^ワりき

浮氣(形) 心のうはくする事。●男女相愛する氣の移り易き事。●多情。●薄情。

うは^ワぎ

上着(名) 表に着る衣類。

うは^ワめ

上目(名) 上に向けて見る眼。

うは^ワみ

褶(名) 上裳に同じ。(和名抄)

うは^ワじらむ

上白(自動四段) 色のさめて白く見ゆる○源氏「ゆるし色のわりなうはじらみたる」

うは^ワひけ

上髭(名) 鼻の下口の上に生ずる毛。

うは^ワひも

上紐(名) 装束の上の紐。●入紐。○好忠集「なつかしく吹き来る風にはかられて上紐さいで暮らす頃かな」

うは^ワも

上裳(名) 一名はしびり。裳の上に着くる裳。(女装)●袴の上に着くる裳。(男装)

うは^ワずり

上摺(名) 衣の表面に草花などを軽く摺る事。○拾玉集「山吹を分けゆく人の衣手や春のかたみの露のうはずり」

うか

(名) うけに同じ。食物をいふ古言。

うかひ

鵜飼(名) 鵜を使ひて川狩する事。又は其鵜を

使ふ人。

うがひ

嗽(名) 口を洗ひ清むる事。●含嗽。

うかひがは

鵜飼川(名) 鵜飼をする川。

うかひぶね

鵜飼船(名) 鵜飼に用ふる船。

うかひび

鵜飼火(名) 鵜飼に焚く篝火。

うかる

浮(自動下二段) 心の浮き立つ。

うかは

鵜川(名) 鵜飼をする川。また其川にてする鵜

飼。

うかがひ

伺(名) 目上に向つて問ふ事。

うかがふ

伺。窺(他動四段) 「一」のぞき見る。●よき

折を待ちねらふ。●目上に對して問ふ。●

目上の人を尋ねる。

うかれがらす

浮鳥(名) 月夜に浮かれ鳴く鵜。

うかれづま

浮妻(名) 遊女。(續千載)

うかれめ

浮女(名) 遊女。

うかれびと

浮人(名) 浪人。●浪士。

うがつ

穿(他動四段) 「一」穴を堀る。●「二」あぐなる。●

穿鑿する。

うがねらふ

(自動四段) 窺ひねらふ。○萬葉「此岡

うから

族(名) に男鹿ふみおこしうがねらひ」

うかむ

浮(自動四段) 一族。●同族。

うかむ

浮(自動四段) 浮ぶに同じ。

うがふ

浮(他動下二段) 浮ぶに同じ。

うかうか

嗽(自動四段) うがひをする。●口を洗ふ。

(副) 心の落ち附かぬ有様。●氣のうかる、

有様。(又)「うかうこ。

うがのかみ

宇賀神(名) 食物を司る神。

うがのみたま

倉稻魂(名) うがの神に同じ。

うがふ

浮(自動四段) 「一」水の上に乗る。●空中に漂

ふ。●浮く。●たゞふ。●「二」ふさ心中に

思ひ出さる。●歌などのおのづから出で

来る。●「三」人死して極樂世界に行く。……此

反對にて地獄に行くを洗むさいふ。

うかぶ

浮(他動下二段) うかばしむる。●うける。●

うかす

うかす。浮(他動四段) 浮ばしむる。

うよ

雨餘(名) 雨の晴れたる後。

うよく

羽翼(名) 羽と翼と。

うた

右翼(名) 軍隊にいふ詞。隊列の右の方。

歌(名) 「一」歌ふ事。●「二」歌はるゝもの。長歌、短

歌、今様、神樂歌、催馬樂、琴唄、長唄、端唄、都々一、手鞠唄、唱歌、讀美歌の類一切の稱。

……俗曲には特に唄の字を用ふ。(三)特に

は短歌。(四)特に長唄端唄の類。歌のみ

にて詞の無き三味線の曲。……淨瑠璃に對

して。(五)謡曲にて一種の謡方の稱。

雅樂(名)

雅樂寮の略。

うた

謡、諷(名)

能樂に用ふる歌曲。高砂、田村、熊

野、羽衣、松風、舟辨慶の類。●謡曲。

うたい

字内(名)

宇宙間。●天下。

うたい

有待(名)

人死して善所を待つ間を云ふ。○太

平記「有待の身」

うたひ

謡本(名)

謡曲を載せたる書物。

うたい

右大辨(名)

官名。……べんを見よ。

うたひ

謡初(名)

「二」一月初めて謡曲を謡ふ儀

式。「二」徳川幕府にては正月二日江戸城に

うたい

鵜飼(名)

鵜飼に用ふる松明。雨中にも

よく燃ゆるもの。

うたい

謡講(名)

集りて謡曲を謡ふ會。

うたひ

歌女(名)

「一」歌うたふ女。「二」藝妓。

うたいし

右大將(名)

官名。右近衛大將の略。

……大將を見よ。

うたい

右大臣(名)

官名。……大臣を見よ。

うたい

歌物(名)

「一」歌はるゝ歌。●歌曲。「二」

雅樂にて神樂、催馬樂、風俗の類。歌曲ある

ものゝ稱。……唐樂、高麗樂の樂譜のみに

て歌なきものに對して。

うた

宇多法師(名)

古代和琴の名。宇多法皇御

遺愛の器。故に此名あり。

うた

枕(名)

梁の上の柱。(和名抄)

雅樂寮(名)

官廳の名。治部省の所屬にて

朝廷の儀式に用ふる歌舞音樂の事を掌るこ

ころ。官吏は頭、助、允、屬あり。●うたのつ

かさ。●うたまひのつかさ。

うた

歌男(名)

歌を謡ふ男。(紀)

疑(名)

疑ふ事。

●あやしみ。●不審。●疑

惑。●疑問。●嫌疑。

歌歌留多(名)

和歌を詠したる歌留多。そ

の上の句を讀みては下の句の記してある札

を取るやうに作れるもの。常には小倉百人

うたがは^ッし

疑(形。形状言シク活) 疑ふべき有様。●あ

やし。●不審な。●不思議な。

うたかた

(名) 「一」水の泡。「二」暫の間。●ほかなき

事の喩。○六帖「うたかたも思へば哀し世の中を誰うきものぞ知らせそめけん」

うたかたばな

(名) 水の泡の如き花。(六帖)

うたがたり

歌語(名) 歌に關する話。●歌話。●歌談。

うたかたびと

(名) 水の泡の如く消えやすき人間。

(雅)

うたが^{ゴッ}ふ^ッ

疑(他動四段) いぶかしと思ふ。●不審に

思ふ。●あやしむ。

うたがき

歌垣(名) 男女一つに集まりて互に歌をうた

ひかはす一種の遊び。今の田舎にて行はるゝ盆踊などの類。男女相戯れ夫婦の約束をなす風など此時に多く行はれたり。(紀)

うたよみ

(名) 和歌をよむ人。●和歌の上手。●歌人。

うたた

轉(名)

うたてに同じ。○萬葉「うしさてもいかで此世を厭ふべきうたある夜の月の影かな」

うたたぬし

(形。形状言シク活)

宴樂の意。○宴席の樂しき有様。(紀)

うたたね

轉寐(名) 寐床に入らずして寐る事。●假寐。

うたつかさ

雅樂寮(名) うたれうに同じ。

うたねんぶつ

歌念佛(名) 僧の唄を交せて歌ひつゝする一種の念佛。

うたながめ

歌詠(名) 歌よむ事。●歌よむ人。(夫木)

うたなし

(形。形状言ク活) 疑無し(略)。(著聞)

うたふ^ッ

歌。謠。唄(他動四段) 「一」聲を長く引き節をつけて唱ふる。●詠する。●吟する。●唱

歌する。「二」長く節ある聲にて鳥の鳴く。

鶏などにいふ。

うたふ^ッ

訴(他動下二段) うたふに同じ。訴訟する。

うたうたひ

歌謠(名) 歌を謠ふ人。●上手に謠ふ人。

うたうたし

(形。形状言シク活) うたてしに同じ。(萬

葉)

うたうら

歌占(名) 「一」和歌の意味にて占ふ一種の

占。「二」歌占の判断を以て營業とする人。

うたのほふ^ッし

宇多法師(名) うたはふしに同じ。

うたのつかさ

雅樂寮(名) うたれうに同じ。

うたのくち

歌口(名) 歌の上手なるたち。●歌の上手。

(十六夜)

うたぐ

踞(自動下二段) 腰を掛くる。(紀)

うたぐ

宴(自動下二段)

酒盛する。○記「盛にうたげたり」

うたぐ

(他動四段)

抱くに同じ。(紀)

うたぐち

歌口(名)

「一」歌の上手なるたち。●歌の上手。●「二」横笛、尺八などの口に當てて吹く穴。

うたぐる

(他動四段)

疑ふに同じ。(俗)

うたまひ

歌舞(名)

歌ふ事と舞ふ事と。●雅樂。

うたまひのつかさ

雅樂寮(名)

がくれうに同じ。(和名抄)

うたまくら

歌枕(名)

「一」序詞に同じ。○新撰體「本に歌枕を置きて末に思ふ心をあらはす」

「二」草木鳥獸に寄せて思を述ぶる。…歌の初句に其比喩すべき物の名を置きて「櫻花」さか「時鳥」さかよみいだすを云ふ。○千五百番歌合「杜若色にいでいはかくれぬを云々」さある歌の判詞に「かきつばたは常の歌枕なり云々」(三)歌によむ名所。……但し其名所に對してよみたるをばいはず。他の比喩などに用ひたるをいふが本なり。○大鏡「六十餘國の歌枕に名あがりたる所々」

うたけ

宴(名)

酒盛。●酒宴。(古)

うたぶくろ

歌袋(名)

和歌の趣向を心中に納めて持つを袋に喩へて云ふ。

うたがふうらくは

(副)

疑ひて考ふれば。●疑うて見れば。●或は。●多分は。

うたゑ

歌繪(名)

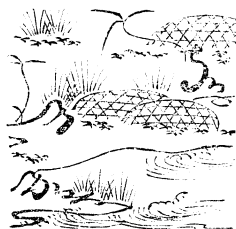
繪の中に

和歌の文字を書き入れて繪と字と並べ讀ましむるやうに作りたるもの。(圖)

うたへ

訴(名)

うったへ。



うたへただすつかさ

刑部省(名)

きやうぶしやうに同じ。

うたて

(副)

心よからず感ずる有様。●いよくあしく。●いよくおもしろからず。●いやに。●へんに。●ひよんに。●うく。○古今「散るさ見てあるべきものを梅の花うたてにはひの袖にさまれる」後拾遺「落ちつる庭をだにさて見るものうたて風

うたてし

(形。形状言ク活)

うたてある有様。……うたてを見よ。○職人盡歌合「今朝はいまだ商ひなきうたてさよ」

うたあはせ

歌合(名) 左右に組を分ち別に判者を立てゝ互に優劣勝敗を競争する一種の雅遊。

うため

歌女(名)

歌うたふ女。(紀)

うたびと

歌人(名)

「(一)和歌をよむ人。●和歌の上手。」「(二)歌うたふ人。●樂人。

うたびくに

歌比丘尼(名) 念佛交りの唄を歌ひつゝ錢を乞ひ歩く尼。

うれ

賣(名)

賣るゝ事。

うれ

(名)

本草の末。●梢。●葉末。○萬葉・柳のうれに驚なきつゝ風雅「うちしめり薄のうれはおもりつゝ西吹く風に靡く村雨」

うれひ

憂。愁(名)

「(一)其事に就きての心の惱み。●心配。●氣がゝり。●なげき。」「(二)訴訟。

うれひふみ

(名)

歎願書。●哀訴狀。

うれは

(名)

末葉。●うらば。

うれはりし

(形。形状言シク活)

憂ふべき有様。●氣がゝりなる有様。

うれたし

慨(形。形状言ク活)

憂痛しの意。○強く憂ひらるゝ有様。●甚しく嘆かるゝ有様。

うれむぞ

(副)

いかにぞ。●いかにぞ。(萬葉)

うれふ

憂。愁(自動上二段。古は四段)

其事に就き心に惱ましく感ずる。●心配する。●なげく。●こまる。

うれふ

憂。愁(自動下二段)

上二段のうれふに同じ。

うれへ

憂(名)

うれひに同じ。

うれへを

愁緒(名)

漢語の愁緒の字の譯語。○愁の續き絶えぬ事を緒に喩へて云ふ。○拾玉集「四十までうれへのなにはつながれぬ」

うれし

嬉(形。形状言シク活)

よろこばし。

うれしがる

(自動四段)

嬉しく思ふ。

うれしなみた

嬉涙(名)

嬉しき極まりて出づる涙。

うれしむ

嬉(自動四段)

嬉れしと思ふ。●うれしがる。●よろこぶ。

うれしぶ

(自動四段)

うれしむに同じ。

うそ

嘘(名)

そらごま。●偽り。●虚言。

うそ

獣(名)

獸の名。なそ。●かはなそ。

うそ

鶯(名)

鳥の名。雀に似て大きく聲の麗しきもの。

うそむく

嘘(自動四段)

うそぶくに同じ。

うそぶく

嘘(自動四段)

「一」口をつぼめて聲を出だす。●口笛を吹く。「二」仰ぎて鳴く。●吼ゆる。●うなる。○「虎嘯けば風起る」風も嘯く寅の時「三」口先にて唱ふる。●小聲にて誦する。○源氏「時につけたる題出だしてうそぶき誦しあへり」

うそぶき

(名)

狂言の面の名。今いふひよつごの類。

うそぶき

喘(名)

喘く事。

うそぶき

(名)

稍や寒く感ずる事。九月十月頃の寒さ。

うつ

鬱(名)

氣の塞ぎて樂しからざる事。

うつ

空(形)

空虚の。●からなる。

うつ

打(他動四段)

「一」たたく。●ぶつ。●投げ附くる。「二」すべてたたくやうなる働をなす。

○「田を打つ」「太鼓を打つ」「杭を打つ」「三」又たたくやうなる働をなして物を作る。○

「刀を打つ」(轉じて)作る事にも云ふ。○

うつ

(自動下二段)

「一」打たるい。○伊勢集「更けし夜の行きあひの霜にうてしかごなご身にさむくあたらずりけん」「二」壓倒さるい。●

うつ

裏(他動下二段)

捨つに同じ。(古)

うつ

渦(名)

「一」水の巻きて作りたる輪をいふ。「二」模様の名。渦の如き形。

うつろ

(名)

内部の空虚なる事。●うつほ。●空虚。●空洞。△(形)「うつろなる。(副)「うつろに。」

うつろひきく

(名)

重の色目の名。表薄紫、裏青。

うつろふ

移(自動四段)

「一」移るに同じ。「二」變化す

る。「三」色の變はる。「四」花の散る。「五」映する。●影のうつる。

うつばり

梁(名)

「一」に同じ。屋根の棟にある木。

うつぼ

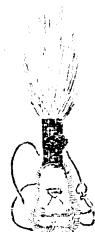
靱(名)

矢を入れて

膏負ふ具。革ま

たは毛皮などに

て作る。〔圖〕



うつぼ

空(名)

「一」中のからなる事。●うつろ。●う

る。●空虚。●空洞。「二」うつぼなる所。

●洞穴。「三」木のうろ。

うったうし

鬱陶し(形。形狀言シク活)

鬱々としたる

有様。●曇りたる有様。●うるさし。

うっとし

(形。形狀言シク活)

うったうしに同じ。

うつち

卯槌(名)

桃の木などにて小さく作りたる槌。

中古の俗。正月初卯の日に内裏にも奉り人々互に贈りあひても祝ひたるもの。之にて一年中の惡鬼を打ち拂ふの意。○枕「五寸ばかりなる卯槌」

うつりが

移香(名)

他の物より移りたる香。

うつりかはり

移變(名)

物事の漸々變り行く事。●變

うつりがみ

遷。

移紙(名) 人より贈り物を受けて其器物に添へ返す紙。

うつりぎ

移氣(名)

變り易き氣性。●浮氣。

うつる

(自動四段)

「一」(移)場所の變はる。●時の變はる。●物事の位置の變はる。●我物の他に傳はる。●其色の他に染まる。「二」(寫)其通りに似て書かる。●似て出来る。「三」(映)影の見ゆる。●透き通る。●色の配合のよく見ゆる。

うつほ

(名)

衣服にいふ詞。重れの衣なしに着る事。

○源氏「山吹の褂の袖いさゝ煤けたるをうつほにて打ち掛け給へり」

うつほ

うつほに同じ。

うつほばしら

空柱(名)

中の空虚になりたる柱。●雨垂を受けて柱の如く作れる樋。○夫木「しのぶわけてうつほ柱にかくる樋は漏るてふ水の口やなからん」

うつほぶね

空船(名)

木をうつろに彫りて作れる舟。

●丸木舟。○平家「かの變化の物をばうつほ舟に入れて流されける」

うつは^リ

器(名)

〔一〕物を入れる、道具。〔二〕道具の總稱。

●器物。●器具。〔三〕國家のためになる人
才。●有用の人才。●器量。

うつはる

(他動四段)

僞るに同じ。(紀)

うつはもの

器物(名)

器に同じ。

うつかひ

鵜使(名)

鵜を使ふ漁師。●鵜飼。

うつかり

(副)

心付かぬ有様。(又)——うつかりこ。

うつたかし

堆(形。形状言ク活)

盛り上がり高まりた
る有様。

うつたふ^シ

訴(他動下二段)

〔一〕他人の前に事情を述
べ立つる。〔二〕其筋に申し出て、裁判を乞
ふ。●訴訟する。●出訴する。

うつたへ^エ

訴(名)

訴ふる事。●公事。●訴訟。

うつたへ^エ

(副)

ひたすらに。●ひとへに。○李花集、木
曾路川うつたへ瀬々の波ならば行きめぐり
ても立ちかへらまし。(又)——うつたへに。

うつたへ

○忠見集「春雨は降りそめし、ごうつたへ
に山を縁になさんさや見し」

うつそみ

(名)

うつしみに同じ。(古)

うつつ

現(名)

〔一〕此世に生れきて居る間。〔二〕覺め
て居る間。……夢の反對。〔三〕誤りて俗に

うつつ

(他動下二段)

打ち捨つの約。◎打ちやる。○
萬葉「古衣うつてし人は秋風の立ち來る時
に物もふものぞ」

うつつなし

現無(形。形状言ク活)

現在の心地のせぬ。

うつなひ

●夢のやうな。(雅)

うつなふ

(名)

うつなふ事。●承諾。●承知。

うつなふ^シ

(他動四段)

うべなふ。●承諾する。●納
受する。○續紀宣命「此物は天にます神地
にます神の相うつなひ奉り福はへ奉る事に
よりて顯しく出でたる寶にあるらしと
も」

うつなし

決(形。形状言ク活)

疑無し。(紀)

うつら

鵜(名)

鳥の名。野に住みて秋の頃あはれに鳴
く鳥。其肉は食用となる。

うつらがみ

鵜紙(名)

古代の紙の名。日に透かせば鵜
の形の見えたるもの。

うつらつき

鵜月(名)

五月の異名。

うつらなす

(枕)

いはひもさほりの枕詞。鵜の如く鵜
飼廻の意。(萬葉)

うつらうつら

(副)

つら／＼。●目前に明かに。○萬

葉「撫子の花取り持ちてうづら／＼見まく
の欲しき君にもあるかも」

うづらやき

鵜焼(名) 料理の詞。油にて鵜の毛色の如
く煎りつけたるもの。

うづらごも

鵜衣(名) 賤しきつるりの衣。●はぎは
ぎの着物。●短き衣。

うづらもち

鵜餅(名) 餅の一種。鵜の羽色に似たるも
の。

うづむ

埋(他動四段。又下二段) 物の中に入れて見ぬ
ぬやうに物を覆ふ。●うめる。

うづむく

(自動四段) 顔を下に向くる。●うつぶく。

うづむく

(他動下二段) うつぶかしむる。

うづう

鬱々(副) 氣の塞ぎて樂からぬ有様。(又)一
鬱々と。

うづのふ

珍(形) 物を譽め稱へて冠らする詞。○萬葉
天皇わがうづの御手もて」

うづく

(自動四段) うつなふに同じ。(祝詞式)
(自動下二段) 「一」空虚になる。「二」心の空し
くある。●ばんやりする。●迂遠である。

○狂「さてもうつけた事いたした」

うづく

(自動四段) づき／＼と痛む。

うづくまる

蹲(自動四段) ひざまづく。●しゃがむ。
●平たくなりてすわる。

うづくし

美(形。形狀言シタ活) 「一」奇麗な。●美麗
な。「二」愛らし。●かはゆらし。

うづくしむ

(他動四段) いつくしむ。●愛する。

うづくし

(名) いつくしみに同じ。●愛情。●慈愛。
埋(自動四段) 埋めらる。●埋もる。●う
もる。

うづまく

渦卷(自動四段) 水の渦をなして廻る。

うづまき

渦卷(名) 渦卷く事。●渦卷く形。

うづけ

(名) うつけて居る事。●うつけて居る人。●
ばんやりもの。●さんま。

うづぶるひのり

十六島海苔(名) 海苔の一種。黒みが
いりたる紫色にて丈の極めて長きもの。雲
州の名産。

うづぶる

鬱憤(名) 心中に積もり重なりて晴れざる憤
り。

うづぶる

(自動四段) うつぶくに同じ。

うづぶしぞめ

(名) ふしぞめに同じ。うつぶすの意よ
り言ひ掛けたる詞。○古今「世を厭ひ木の
もさ毎に立ちよりてうつぶしぞめの麻の衣

なり」大和「霜雪のふるやの中に獨寐のう
つぶしそめの麻の袈裟なり」

うつぶしめ

(名) うつぶしになりたる目づかひ。●下
を向く目。(續世繼)

うつぶす

(自動四段) うつぶき伏す。

うつぶす

(他動下二段) うつぶさする。
討手(名) 征伐に向ふ人數。●賊徒を討ちにゆく
官軍。

うづゑ

卯杖(名) 卯槌の如く作れる杖。正月初卯の日
に用ふる事すべて卯槌に同じ。○夫木「君
がため常磐の山の玉椿いはひて取れる今日
の卯杖ぞ」

うづるほがひ

卯杖祝(名) 卯杖の祝。(榮花)

うづさん

鬱散(名) 鬱を散する事。●憂さ晴らし。●氣
晴し。

うづぎ

卯木(名) 灌木の名。夏の初め時鳥の鳴く頃に
白き花咲くもの。

うづき

卯月。四月(名) 四月の異名。

うづきのいみ

卯月忌(名) 四月にある物忌。(新勅撰)

うづゆふの

(枕) こもるの枕詞。○萬葉「うづゆふの
こもりてませば」

うづみひ

埋火(名) 灰にて埋み置く火。火鉢、手あぶ
り、火桶の類。

うづみひ

埋樋(名) 土中に埋めたる樋。

うづみもん

埋門(名) 家の背面にある小門。●忍びの
門。

うづし

寫(名) 〔一〕寫す事。●寫したる書畫。〔二〕模
造。●模造品。

うづし

移(名) うづしうまの略。

うづし

(名) 染色の名。紅。○萬葉「秋の霧はうづし
なりけり水鳥の青葉の山の色づく見れば」
古代薬物の名。○源氏「よるづのすぐれ
たるうづしをしめ給ひ」

うづし

現。顯(形。狀言シク活) うづしにてある。●現
在にてある。●正氣のある。●自覺のある。

うづし

○記「うづしき青人草」續紀宣命「うづしく
出でたる實にあるらし」

うづし

移花(名) 綸具の名。青花の汁を紙に浸し
て入用の時繰り出すやうにしたるもの。

うづし

渦潮(名) 渦巻く潮流。(萬葉)

うづし

現世(名) 現在の世。●人の生きて居る間。

うづし

移馬(名) 乗替の馬。

うっしのはひ

移灰(名) 紅の色を染むる時に用ふる灰。

うっしのうま

移馬(名) うっしうまに同じ。

うっしぐら

移鞍(名) 唐鞍に摸して作れる鞍。

うっしごころ

現心(名) 自覺のある心。●亂れずにある心。●正氣。

うっしゑ

寫繪(名) 「一」寫してかきたる繪。●自然の事物を寫し取りたる繪。「二」燈の光りにて映し出だして見する繪。●影繪。●幻燈。

うっしざま

現様(名) 正氣の模様。

うっしみ

現身(名) 此世に生きて居る間の身。《古》

うっしびど

現人(名) 「一」現世の人。●生きて居る人。

うづもる

埋(自動下二段) うづまると同じ。●「二」在俗の人。僧ならぬ人。……《雅》

うづせ

(名) うづせ貝の略。《源氏》

うづせがひ

(名) 殻のみにて實の無き貝。●貝殻《雅》

うづせみ

空蟬(名) 「一」蟬の拔殻。●もめけの蟬。「二」

うづす

(他動四段) 「一」(移)場所を變へしむる。●時を變へしむる。●物事の位置を變へしむる。●我物を他に傳ふる。●其色に他の物を染

うっす

變(自動サ變) 氣の塞ぐ。●鬱鬱とする。●陰氣

うっすり

(副) 薄々。●薄く。●うすらかに。●淡く。

うっすら

(副) うっすりに同じ。《俗》

うね

畝。畦(名) 田畑に高低をなして隣の植物との堺

うねべ

(名) うねめに同じ。

うねり

(名) うね／＼する事。●うねる事。

うねる

(自動四段) 畝の如く高低を爲す。●うね／＼

うねうね

(副) うねる有様。●波などの高くなり又低

うねめ

采女(名) 「一」女官の名。天皇の御膳の御給仕

なごする役。諸國郡司の女にして琴、和歌などに達したるものを貢せしむ。「二」采女司の略。

うねめのつかさ

采女司(名) 官廳の名。宮内省の所屬

にて采女を支配するところ。

(名)

うなじの略。

うなわ

垂髪(名)

「一」童子の垂らしたる髪。「二」髪を垂らして居る子供。五六歳より十二三までの頃。男女共に云ふ。

うなわはなり

(名) うなわに同じ。◎はなりは結ばずに放し置くの意。(萬葉)

うなわまつ

馬鬣松(名)

うなわの髪の如き形の松。(源氏)

うなわこ

垂髪子(名)

うなわの(二)に同じ。

うなばら

海原(名)

廣き海。

うなる

唸(自動四段)

「一」うめく。●うん／＼いふて苦しむ。「二」うなる如き聲を出す。

うなほ

鵜縄(名)

鵜に魚を捕らする時鵜に結び付けて片端を漁夫の持つ縄。

うなわく

膿湧(自動四段)

沸く如く膿の出づる。(紀)

うながける

(自動四段)

他人の頸に手を懸けて居る。

●深く愛する。●深く親しむ。○空穗「うながけり親の撫で養ひ給ひし時は」

うながぶす

(自動四段)

頸を垂る。○記「やまこの一本薄うながぶし汝が泣かさまく」

うながみ

頸髪(名)

馬の頸の毛。●たてがみ。(和名抄)

うながし

令(名)

長官。●かしら。(紀)

うながす

促(他動四段)

催促する。●督促する。(他動四段)

うながす

頸に懸くる。○記「うながせる玉のみすまる」

うなだる

頸垂(自動下二段)

頸を垂る。

うなづく

點頭(自動四段)

頭を下に動かして承諾の意を表はす。●合點をする。

うなね

頸根(名)

頸の根。●襟首。

うなねつきめき

頸根突拔(句)

頸根を充分下に突きて拜禮をする。●めかつく。(祝詞式)

うなぐ

(他動四段)

頸に懸くる。○萬葉「うなぐる玉」

うなや

檻(名)

牢屋。●獄。(紀)

うなで

田地に水を掛くる爲の溝。●用水堀。○夫木「ますらながうなでの道に五十串立て水口まつる時は來にけり」

うなさる

(自動下二段)

夢に襲はる。

うなさか

海境(名)

海中の境界。●國土と龍宮城との

うなき

境。(萬葉)

鰻(名)

川魚の名。細長くして鱗なく滑らかなもの。食用として美味なり。異名は……

むなき。●う。●宇治鰻。

うなぎめし

鰻飯(名)

食品の名。鰻の蒲焼を入れたる飯。

うなめ

畦目(名)

鰻にいふ詞。鰻の糸の田畑の畦のやうに並びたるもの。

うなじ

頸(名)

頭の後ろの方。●ぼんのくぼの處。

うら

浦(名)

海邊の土地。●海邊の村。

うら

裏(名)

表の反對の處。●内。●うしろ。●逆様。

うら

占。ト(名)

物事によりて未來の吉凶を判じ見る事。●うらなひ。●卜筮。

うら

(名)

うれに同じ。草木の末。

うら

(名)

心。●心の内。○後撰「春日さす藤のうら葉のうらさけて君し思はれ我も頼まん」

うら

裏板(名)

家の屋根裏に張る板。

うら

末葉(名)

草の葉末。○藤のうらばし

うら

(名)

うらうへに同じ。●裏表。●反對。△

うら

(形)

うらうへに同じ。●裏表。●反對。△

うらぼん

盂蘭盆(名)

祭。

佛法にて七月十五日にする佛の

うらぼん

盂蘭盆會(名)

うらぼんに同じ。

うらべ

浦邊(名)

浦のほとり。

うらべ

占部(名)

神祇官に屬して神祭の時占の事を掌る官職。……古は神の祭を爲すにも其時日、場所方法等すべて占により神慮を伺ひて行ひたればなり。

うらごふ

占問(名)

占を問ふ。●うらなふ。(雅)

うらごふ

占問橋(句)

橋占にて占ふ事。○夫木「なぐまて占問ふ橋よ正しかれつれなき中を待ちもわたらん」

うらち

浦路(名)

浦の入り込みたるところ。

うらわ

浦曲(名)

海の入込みたるところ。

うらわ

兆(名)

うらなひに同じ。(紀)

うらわ

(形。形狀言々活)

わかしに同じ。まだ若々しい。●まだかわい。●まだ新しい。○

うらわ

萬葉「高圓の秋野のうへの撫子の花うらわ

かみ人のかざし撫子の花」蜻蛉「見る人は猶いさうらわかく」

うらわ

(自動下二段)

末葉の枯る。○新古今「ひ

こめ見し野邊のけしきはうらがれて露のよすがにやざる月かな」

うらかた

占形(名)

「一」鹿龜などを焼きて占をする時。其焼け方にあらはれたる形。「二」すべて占にあらはれたる模様。

うらがれ

(名)

うらがるゝ事。

うらがなし

(形。形状言シク活)

何さなく心の内の哀しき。(雅)

うらかく

裏缺(自動四段)

鏡児などに矢の當りて裏まで貫く。

うらがへる

裏返(自動四段)

裏の表となる。●轉倒する。

うらがへし

裏返(名)

裏返す事。

うらがへす

裏返(他動四段)

裏を表にする。

うらがす

(他動四段)

愉快を興ふるやうにする。●慰むる。●心を浮き立たしむる。(古)

うらたな

裏店(名)

他の家の裏に建たる家。●裏屋。

うらなひ

占。ト(名)

「一」占ふ事。●うら。●卜筮。●易。「二」占ふ業とする人。●賣卜者。

うらなふ

占(他動四段)

物事によりて未來の吉凶を

うらなぐ

(自動下二段)

判じ見る。●占ひをする。●易をくろ。心の中に嘆く。○萬葉「むらぎもの心を痛み。ぬに子鳥うらなげなれば」

うらなき

浦和(名)

浦のなき。(萬代)

うらなし

裏無(名)

古代草履の一種。裏のなきもの。後世の緒太の類。

うらなし

裏無(形。形状言ク活)

心の裏表の無き。●心に奥底のなき。●腹藏の無き。

うらら

(副)

のどかなる有様。●晴れわたりたる有様。

(又)「うららに。○堀川「春の日のうららに照らす垣根には友符つ雪ぞ消えがてにする」△(形)「うららなる。

うららか

うららに同じ。(形)「うららかなる。(副)「うららかに。

うららかけさ

(名) うららかなる事。○源氏「年立ちかへる朝の空のけしきなごりなく曇らぬうらいかけさには」

うらむ

恨。怨(他動四段。又上二段)

他の物事を腹立たしく思ふ。●又其物事の腹立たしく思ふ心を述ぶる。

うらむらむは

(副) 残念な事には。

裏紫(名) 表は薄紫にして裏の濃紫なる衣。また袴。……和歌には多く恨むの詞より言ひかけて用ふ。○謡曲「うらむらさ

きの藤袴」拾玉集「行く春なうらむらさきの藤の花かへるなよりに染めや捨つらん」

占(他動下二段。又四段) うらなふに同じ。

うらふ

(記)

うらうち

裏打(名) 「一」衣に裏を附くる事。「二」布、紙などの裏に紙を貼る事。

うらうら

(副) うらいかなる有様。●長閑に。●晴れわたりて。(又)——うら——さ。○源氏「海の面はうら——さなきわたりて」(又)——うら——に。○萬葉「うら——に照れる春日に雲雀あがれ」

うらうへ

裏表(名) うらはら。●あべこべ。●ありゃこりゃ。●反對。△(形)——うらうへへの。

(副)——うらうへに。

うらのかみ

陰陽頭(名) 陰陽寮の長官。

うらのつかさ

陰陽寮(名) おんやうれうに同じ。(和名抄)

うらぐ

(自動下二段) 愉快になる。●心の淨き立つ。

うらぐはし

(古) 浦細(形) 浦の面白き有様。○萬葉「うらぐはし布勢の海水に」

うらやむ

羨(他動四段) 他の物事の通りに我もありたしと思ふ。

うらやまぶき

裏山吹(名) 重の色目の詞。表黄、裏萌黄。又は表黄裏紅。

うらやまし

羨(形。形状言シク活) 羨むべき有様。

うらやみ

羨(名) 羨む事。

うらやみなし

羨無(形。形状言ク活) 不公平なし。●恨みこなし。○源氏「かたんに羨みなくこそものすべかりけれ」

うらま

浦回(名) 浦のまはり。○萬葉浦まより漕きて渡れば

うらまつ

(他動四段) 心の内にて待つ。○萬葉「秋風に今かくさ紐さきてうらまち居るに月かたぶきぬ」

うらぶる

(自動下二段) 「一」つらくなる。●哀しくなる。○萬葉「君に戀ひうらぶれ居れば秋の野の秋萩しぬき小男鹿鳴くも」(二)轉じて

はくたびるゝの意。●疲れて休むの意。○謠

曲「値過を少し松蔭にうらぶれ給へ墨衣」

うらこふ

(自動上二段) 心の内に戀しく思ふ。(萬葉)

うらごし

浦越(名) 浦を吹き越す風。

うらへ

占(名) うらふ事。●うらなひ。(萬葉)

うらて

裏手(名) 相撲、歌合などの第一番目の取組。

うらで

占手(名) 占にあらはれたる模様。●占形。●前兆。○謠曲「さて松明の占手はいかに」

うらぶち

浦里(名) 海邊の村里。

うらぶち

(自動上二段) 「一」うらさびしくなる。●心細くなる。「二」浦の景色のさびしくある…

(雅)

うらぶし

(形。形狀言シク活) 何となく心の内のさびしき。

うらぶり

裏切(名) 敵に内通する事。●反り忠。●内應。

うらめし

恨(形。形狀言シク活) 恨むべき有様。

うらみ

恨(名) 恨む事。●遺恨。

うらみ

浦面(名) うらまに同じ。

うらみち

裏道(名) 本道の外の小道。●問道。

うらじろ

裏白(名) 草の名。正月の飾りに用ふるもの。

うらしほ

浦汐(名) 浦の汐。(萬葉)

うらびる

(自動下二段) つらくなる。●哀しくなる。○古今「秋萩にうらびれ居れば足引の山下さ

うむ

(名) 諸否。●いやおう。

うむ

有無(名) 有る事と無き事と。

うむ

運(名) 人の身の幸不幸の廻り合せ。●時節の廻り合せ。●仕合。

うん

生。産(他動四段) 生れさせる。●分娩する。

うむ

倦(自動四段) 心の勞るゝ。●あきがくる。●退

うむ

風する。

うむ

績(他動四段) 麻類の纖維を續け合せて糸に造る。

うむ

埋(他動下二段) うづむに同じ。

うむ

(自動四段) 「一」菓物の熟する。「二」腫物の膿を

うむ

持て。

うん

(感) 「一」目下に對して承諾の意を示す聲。●お

うん

い。●おい。「二」うなる聲。

うん

運搬(名) 品物を運ぶ事。●運送。●運輸。△

うん

(動)―運輸す。

うん

運搬(名) 品物を運ぶ事。●運送。●運輸。△

うんばん

雲版(名) 佛事などの時打ち鳴らす具。青銅の板にて雲形に造り鑿の如く釣り置くもの。

(圖)



うんどん

鯁鮓(名) 食品の名。小麥粉を練りて蕎麥切の如くにしたるもの。

うんどう

運動(名) (一)物の動く事。(二)健康を保つ爲に身體を動かす事。●散歩。●體操。(三)奔走して周旋する事。……△(動)―運動す。

うんちん

運賃(名) 運送の賃金。●運搬費。●遞送費。

うんうん

云云(名) しかじか。●かやうく。

うんか

雲霞(名) 雲と霞と。……多く大勢の人を遠く望む時の形容に用ふ。

うんが

運河(名) 運搬の便利に作りたる堀割の川。●堀割。

うむかつき

(名) 産み月。●臨月。

うんかん

雲縹(名) うんげんに同じ(盛衰)

うんかく

雲客(名) 雲の上人。

うむかし

(形。形狀言シク活) おむかしに同じ。●うれし。●よろこばし。(續紀宣命)

うむかしむ

(自動四段) うむかしく思ふ。

うんよう

運用(名) はたらかし用ふる事。△(動)―運用す。

うんそう

運送(名) 品物を運ぶ事。●運輸。●運搬。

うんどう

溫糟(名) 昔の粥の名。味噌と酒の糟とを少しばかり四角に刻みて入れて煮たるもの。

うむく

(自動四段) うめくに同じ。

うんげん

雲縹。暈縹(名) 種々の彩色を以て縹のやうに限り分けたる錦。

うんげんべり

雲縹縁(名) 雲縹の縁をつけたる古代の疊。

うんこん

雲根(名) 石の異名。

うんてい

雲泥(名) 雲と泥と。……物事の大差ある場合にいふ詞。●月竈。

うんてん

運轉(名) (一)器械などの廻る事。又廻らす事。(二)又その如く繰廻す事。△(動)―運轉す。

うんさい

雲齋(名) 織物の名。木綿の一種にて足袋の底などに用ふるもの。雲齋は織り出したる人の名なりと云ふ。

うんき

雲氣(名) 雲の立つ氣色。

うんき

溫氣(名) 蒸し暑き事。

うむぎ

蛤(名) はまぐりの古名。紀)

うんゆ

運輸(名) 物を運び送る事。●運搬。△(動)！

うんぬい

運輸す。

うんぬい

運命(名) 廻り来る天命。●運。●廻り合せ。

うんじや

●仕合せ。

うんじや

雲上(名) 雲の上。●禁中。

うんじ

運上(名) 租税。

うんし

温州蜜柑(名) 蜜柑の一種。元支那の

温州産にして殊に味の甘美なるもの。

うむす

(他動四段) 蒸すに同じ。

うんず

(自動サ變) 一説には。倦む。●いやになる。●

退屈する。●がっかりする。●又一説には。

溫すの文字。●心中にて憤る。○伊勢「あ

てなる女の尻になりて世の中を思ひうんじ

て京にもあらず遙なる山里に住みけり」源

氏「ふすべられけるほごあらばに人もうん

じ給ひぬべければ」

うんする

雲水(名) 行脚の身。●頭陀。

うう

植(他動下二段) 草木の根または種を地に埋めて

生ひ立たしむる。

うう

餓。飢。饑(自動下二段) 腹の減る。●ひもじくな

る。●ひだるくなる。

うのはな

卯花(名) 「一」卯つ木の花。夏の初に雪の

如くさくもの。「二」重の色目の名。表白、裏

青。「三」豆腐の製の異名。

うのはな

卯花藏(名) 錠の藏の名。青糸と白糸

と一段置きにしたるもの。(保元)

うのはな

卯花重(名) 表白く裏青き衣。(枕)

うのはな

卯花月夜(名) うのはなつきよに同

じ。

うのはな

卯花月(名) 陰曆四月の異名。

うのはな

卯花月夜(名) 卯の花の白くして月夜

に似たるをいふ。

うのはな

(名) 卯花 朽の意。◎卯の花の散る

頃に降る雨。

うのはな

(名) うのはなくたしの轉。

うのはな

卯花山(名) 卯の花の咲く山。(萬葉)

うのはな

卯花葺(名) 卯の花にて葺きたる如く其

花の下に覆はれたる屋根。

うのまひ

右舞(名) 右方の舞樂。

うのけ

(名) 兎の毛。……極めて些細なる物事の喩へ。

うのみ

鵜呑(名) 鵜の魚を呑む如く少しも嚙まずに呑み込む事。

うく

浮(自動四段) 「一」水の上に乗る。●空中に漂ふ。

●浮ぶ。●漂ふ。「二」うかる。●うき／＼する。「三」不確かである。●うそらしくある。

うく

浮(他動下二段)

浮かしむる。

うく

受(他動下二段)

他の事物を迎へ留むる。

うく

請(他動下二段)

迎へ取る。

うぐひ

(名)

「一」鵜の食ひたる魚。又其食ふべき魚。○夫木「篝火の光にまがふ玉藻にはうぐひの魚もかくれざりけり」二魚の名。鱗細く鱗赤く全體に赤、鼠の堅筋あるもの。

うぐひす

鶯(名)

鳥の名。春の初より美しき聲にて鳴く愛らしき小鳥。

うぐひすち

鶯茶(名)

染色の名。茶を黒さを帯びたる緑色。

うぐひすそで

鶯袖(名)

賤しき人の着る衣の一種。脇を縫ひて袂なく普通の衣服よりも小さく袖を作りたるもの。●東小袖。

うぐひすな

鶯菜(名)

野菜の名。小松菜の一名。

うぐひすもち

鶯餅(名)

青きなこをかけたる餡餅。

うくは

浮羽(名)

盃の古名。(紀)

うくつ

迂濶(名)

迂濶に同じ。●まがり遠き事。△(形) 迂濶なる。(副) 迂濶に。

うや

(名)

いやに同じ。●禮。●禮義。(紀)

うやなし

禮無(形。形狀言ク活)

禮なし。●無禮な。

うやうやし

恭(形。形狀言シク活)

禮儀を守る有様。●恭ひ慎しむ有様。●慎しみ深き有様。

うやまひ

敬(名)

敬ふ事。●尊敬。

うやまふ

敬(他動四段)

人に對して禮を盡す。●尊敬する。●あがめる。●尊ぶ。

うやまほし

(名)

うやは禮にて禮帽の意。◎立烏帽子の一名。(十訓抄)

うま

馬(名)

獸の名。體大きく脚力強くて運搬用、軍用、乗用等に適する獸類中最も要用の動物。

うま

午(名)

午の方角は眞南。十二支の一つ。……午の時は正午十二時。

うま

旨(形)

うまさ。●味よき。●美味なる。○「うま煮」うま酒

うま

貴(形)

貴き。●高貴なる。○「うま入」

うまい

熟寝(名)

よく寝入る事。●熟睡。

うまいひ

甘飯(名)

うまい飯。(萬葉)

うまいち

馬市(名)

馬を賣買する市。

うまいくさ

馬軍(名)

騎兵。

うまば

馬場(名)

馬乗る場所。●ばい。

うまに

馬荷(名)

馬に負はする荷物。●駄荷。

うまに

甘煮(名)

料理にいふ詞。味淋醬油などに味

うまに

を付け魚類野菜などをうま煮る事。又は

其煮たる物。

うまれ

右馬寮(名) 官廳の名。左馬寮と並び立ち

て天皇の御馬一切の事を掌るところ。官吏

は頭(權頭あり)助、允、屬あり。

うまゐる

生。産(自動下二段)

母體より子が出づる。●分

娩する。●出産する。

うまる

埋(自動四段)

うづもるに同じ。

うまはる

(自動四段)

殖え廣がる。●蕃殖する。(紀)

うまかひ

馬飼(名)

上古馬を飼ふを務めし人。

うまかた

馬方(名)

馬を牽くを業とする人。●馬干。

うまかた

馬形(名)

「一」作り物の馬。古へ陰陽師の祓

の具に用ひたるもの。「二」馬の繪。

うまかたのし

うじ

馬形障子(名) 古へ禁中に在り

うまかけ

馬駈(名)

て打毬騎馬唐人の畫をかきたる障子。馬を駈け合す事。●競馬。

うまたらひ

馬盥(名)

馬を浴せしむるに用ふる盥。●ばだらひ。

うまたて

馬立(名)

馬を立て置く所。●馬繋ぎ。

うまれ

生(名)

「一」生るゝ事。●生れたる場所。「二」

うまれ

生れ付き。

うまれつき

生附(名)

生れたる時より備はりたる性質

うまぞひ

生得。

●天稟。●先天的。

うまぞひ

馬添(名)

主人の乗馬に附き添ひて供する

うまつなぎ

馬繋(名)

馬を繋ぎ置く所。●馬立。

うまつなぎ

馬次(名)

驛馬を次ぎ替ふる事。又其場所。

うまつなぎ

宿驛。

うまねぶ

熟睡(名)

うまいに同じ。(著聞)

うまら

(名)

灌木の名。うばらに同じ。●いばら。●ばら。○萬葉道の邊のうまらのうれに。

うまらに

(副)

うまく。●味よく。(紀)

うまらに

産む。(萬葉)

うまらに

馬錢(名)

旅立つ人に物品詩歌などを贈

うまらに

馬錢別。

◎昔し馬に乗りて行く人を

うまらに

事。

●錢別。

うまらに

事。

●錢別。

うまらに

事。

●錢別。

うまらに

事。

●錢別。

送りて。待て暫しと馬の鼻づらを此方へ向
けさせ告別の辭、詩歌、物品等を贈りたるよ
り起れる詞。

うまのり

馬乗(名) 「一」馬に乗る事。●騎馬。●馬に

乗りたる人。●騎者。「二」馬乗り袴の略。

うまのりばかま

馬乗袴(名) 乗馬の時に用ふる袴。●

まちだか。

うまのつかさ

右馬寮(名) うまれうに同じ。(和名抄)

うまのつみ

馬爪(枕) 筑紫の枕詞。馬の爪を衝くこと

ある意。(萬葉)

うまのくぼがひ

紫貝(名) 貝の名。今いふ、子安貝。(和

名抄)

うまぐはし

馬鐮(名) 農具の名。まぐはに同じ。

うまのきほね

食槽(名) 馬の下顎骨。(和名抄)

うまぢ

厩(名) 馬を飼ひ置く小屋。

うまや

驛(名) 「一」昔し驛馬の次ぎ立てを爲したる場

所。「二」轉じて。旅人宿泊所のある土地。●

宿。●驛。

うまぢけ

驛路(名) 宿驛のある街道。●本街道。……東

海道、中山道の類。

うまぢけがし

(副) 今さくくとも。●もうさくくとも。○

うまはばり

大和「しのづかのうまやく」を待ちわびし
君はむなしくなりぞしにける」

うまけむり

馬廻(名) 武家の役名。主君の馬の側に附

うまけね

き従ふ役。●近習。

うまがね

馬烟(名) 馬の走る爲に立つ砂烟。

うまじ

馬槽(名) 「一」牛馬の食物を入るゝ布の袋。

うまじ

(空穗)「二」飼葉桶。

うまじ

孫(名) まごに同じ。○徒然「其子うまごまで

うまじ

は」

うまじ

(枕) あやの枕詞。美き織りの綾さへる

うまじ

意。○萬葉「うまこりのあやに乏しき」

うまじ

首蓆(名) 野草の名。三つ葉にして夏の利

うまじ

め蓮華草に似たる白色もしくは紅色の花咲

うまじ

くもの。

うまじ

(名) 馬の踏み回ませたる蹄の跡。○夫木

うまじ

「數ならぬ身に知られたる馬さくりさのみ

うまじ

や同じ跡を尋ねん」

うまじ

味酒(名) うまき酒。●美酒。

うまじ

味酒(枕) 「一」三輪(地名)の枕詞。美酒の神

うまじ

酒と續く意。(萬葉)「二」三諸(地名)の枕詞。

うまじ

酒の實みかゝる意。(萬葉)

うまさけな

味酒を(枕)

「一」うまさけに同じ。なほ呼

び出だして調を添ふる詞。「二」神なび山(地

名)の枕詞。酒を醸むさかいる意。

うまさけの

味酒の(枕)

うまさけに同じ。

うまさけ

牧(名)

まきに同じ。牧場。(後拾遺)

うまゆみ

馬弓(名)

馬上にて弓射る事。●騎射。(和名抄)

うまし

旨。美。甘(形。形状言々活)

「一」よし。●結構な

る。●充分なる。「二」味のよし。●美味な

る●甘味なる。

うまじろし

馬印(名)

近古以來軍器の名。出陣の時大

將の馬前に立つる目印。長き柄の先に家の

紋なごを作り其下には吹流に似たる垂あ

うましくに

美國(名)

よき國。上古我國の美稱。

うましもの

(形)

うまさけ物の。●美味なる。○萬葉我

妹子に逢はず久しうましものあべ橋の昔

むすまでに

うまじもの

馬自物(形)

馬の有様に。●馬の如く。●

馬のやうに。○萬葉「馬じもの繩さりつけ

て」同「馬じもの立ちてつまづく」

うまびと

貴人(名)

貴き人。●きにん。●高貴の人。

うますめ

石婦(名)

産ます女の意。○一生子を生まぬ

女。

うけ

泛子(名)

釣糸に附くるもの。||うきに同じ。○

古今「伊勢の海に釣する海士のうけなれや

心一つを定めかれつる」

うけ

覆槽(名)

中を空虚にして桶をうつむけたる如き

形に作りたる臺。此上に立ちて舞を舞ふ時

足拍子など踏鳴らすためのもの。……うけ

ふれを参考せよ。○記「天鈿女命云云。天の

岩屋戸にうけ伏せて踏みさゝるかし」

うけ

有卦(名)

陰陽道の線方にて生れ年の干支により

其年これに當りたる人は七年間吉運に向ふ

さいふもの。之を有卦に入るさいふ。たゞ

へば今年は甲子、丙午の年の人が有卦に入

るさいふ類なり。其入りたる人を祝ふには

「ふ」の字の頭に附く品物を七つ贈るを習

とすし

うけ

受(名)

受くる事。●受け支ふる物。

うけ

請(名)

答へ。●反答。●挨拶。

うけばる

(自動四段)

我のみ承知で威張る。●獨りで

得意に爲る。●天下暗れて事をする。○岩鏡「いよ／＼身重く勢そふ事がざりなくてうけざりたるさまなり」

うけにん

請人(名) 引請人。●保證人。

うけとり

受取(名) 受取りたる旨の書附

うけとる

受取(他動四段) 我方に受けて取り入る。

●領收する。●落手する。

うけを

受緒(名) 鎧の袖の後に附くる組緒。

うけおひ

請負(名) 請負ふ事。

うけおり

浮織(名) うきおりに同じ。

うけおふ

請負(他動四段) 土木工事など。或金高にて其

工事一切を引請くる。

うけはしけ

(名) 咀ひがましき事。●咀ふやうなる事。

△(形) ーうけはしけなる。(副) ーうけはし

げに。○源氏「式部卿宮の大北方宮にうけ

はしけなる事ごもなのたまひつゝ」

うけがふ

(他動四段) 承知する。●承諾する。●受合

ふ。

うけだち

受太刀(名) 切り込む敵の太刀を受け留むる

太刀。

うけたまはり

承(名) 生命を承りて守る事。●擔任。●

うけたまはる

受持。承(他動四段) 聞く。……人と對話の時

敬語の意にて用ふ。●貴人の仰を聞く。

うけつく

受付(他動下二段) 受け入る。●受引く。●

取り合ふ。

うけつぐ

受繼(他動四段) 一方より受けて一方に渡

す。●取り次ぐ。

うけつけ

受付(名) 官廳會社などの取次の人。又は其

詰所。

うけなは

浮繩(名) 魚を釣るための繩。○山家集「腹

赤釣る大わた崎のうけなはに心かけつゝ過

さんさぞおもふ」

うけら

荒(名) 草の名。をけらに同じ。(萬葉)

うげん

有驗(名) 祈りてしるしのあらはるゝ事。△

(形) ー有驗の。○「有驗の高僧」

うげん

雲澗(名) うんげんに同じ。

うげんべり

雲澗縁(名) うんげんべりに同じ。

うけつり

受賣(名) 取次きて賣捌く事。

うけく

(形) 憂きに同じ。○古今「世の中のうけくに

あきぬ奥山の木の葉にふれる雪やけなま

し」

うげづつ

穿沓(名) 破れたる沓。(萬葉)

うけふ

誓(他動四段)

「(一)うけひを爲す。(二)祈る。○萬葉「水の上に敷かく如き我命妹に逢はんさうけひつるかも」(三)阻ふ。○伊勢罪もなき人をうけへば忘草おのが上にぞ生ふさ

うけぶるまひ

有卦振舞(名) 有卦に入りたる人の行ふ祝の饗應。(枕)

うけふね

浮舟(名) うきふねに同じ。(夫木)

うけぶね

字氣槽(名) 覆槽に同じ。中古の頃には一の神祭の儀式となりて之を用ひたり。貞觀儀式に曰く「御巫字氣槽を覆せ其上に立ち銚を以て槽を撞く。一度畢る毎に伯(神祇伯)木綿を結ぶ。訖りて御巫舞ふ」

うけぶみ

請文(名) 請書。●請狀。

うけこむ

受込(他動四段) 引受くる。

うけあひ

請合(名) 請け合ふ事。●保證。

うけあふ

請合(他動四段) 確かなりと誓ふ。●引請くる。●保證する。

うけみ

受身(名) 他の働を受くる位置に立つ事。

うけし

請書(名) 官職任免の辭令を拜命したる旨を記

うけじやう

して其筋に出だす書面。請狀(名) 引請の證文。●保證狀。

うけひ

誓(名) 「(一)神に祈り目前の事物に結果を期して立つる誓約。たゞへば神武天皇が嚴靈を丹生の川に洗め。我能く天下を平げば大小の魚皆酔ひて流れんさうけひ給ひしに魚こまゝく浮び出でゝあきさひたるの類。(古)

うけひく

承引(他動四段) うべなふ。●承知する。●承引する。

うけひき

承引(名) 承け引く事。●承諾。●承引。

うけもち

受持(名) 受け持つ事。●擔當。●擔任。

うけもちのかみ

保食神(名) 五穀を掌る神。●食物を掌る神。

うけもつ

受持(他動四段) 擔當する。●擔任する。

うけもん

浮文(名) うきもんと同じ。

うふ

右府(名) 右大臣の異名。『うふに同じ、産(名) 生れた儘。

うぶ

産井(名) 産湯に用ふる水を汲む井戸。

うぶがみ

産神(名) 産土神の略。

うぶがみ

産髪(名) 生兒の髪。

うぶね

鵜舟(名)

鵜飼に用ふる漁舟。

うぶや

産屋(名)

「一」昔し婦人の産をする時に籠りたる別棟の家。「二」後世に産をする部屋。

うぶやしなひ

産養(名)

小兒生れて三夜、五夜、七夜、九夜などにする祝。親類其他よりも品物を贈りなどして賀するなり。○榮花「三日の夜は本家、五日の夜は攝政殿より、七日の夜は後の宮より、さきよくいみじき御うぶやしなひなり」

うぶげ

産毛(名)

初生兒の髪。●産髪。

うぶこゑ

産聲(名)

初生兒の初めて立つる聲。

うぶぎ

産着(名)

初生兒の着る衣。

うぶぎぬ

産衣(名)

産着に同じ。

うぶゆ

産湯(名)

初生兒の初めて浴する湯。

うぶめ

孕婦(名)

「一」懷妊の女。「二」産婦。「三」妊婦死して其靈魂が鳥に化し迷ひて出づると想像せしもの。

うぶすな

産土神(名)

「一」出生せし土地。「二」出生せし土地鎮守の神。●轉じては總べて我住居する土地鎮守の神。

うこ

(名)

なこに同じ。(紀)

うこ

雨後(名)

雨の降りたる後。●あまあがり。

うごろもち

土龍。鼯鼠(名)

獸の名。鼠に似て地中に

住み時々土を持ちあぐるもの

うごかす

動(他動四段)

「一」動かす。しむる。「二」誘ふ。●すゐむる。○源氏「折々は猶のたまひ動かしけり」

うごなはる

(自動四段)

集まる。●集まり居る。○祝詞式「うごなはれる親王諸王諸臣百官の人等」

うこん

鬱金(名)

「一」草の名。根より黄色の繪具を取るもの。「二」黄色の染草。「三」黄色の染色。

うこん

右近(名)

右近衛府の略。

うこんのつかさ

右近衛(名)

右近衛府に同じ。

うこんゑ

右近衛府(名)

右近衛府の略。

うこんゑふ

右近衛府(名)

官廳の名。左近衛府と並び立ちて天皇を守護し奉る武官の役所。

うがふ

鳥合(名)

別々の物の寄り集まり。

うごく

動(自動四段)

一處にさまりて居らぬ。●はたらく。

うごま

(名)

胡麻に同じ。(和名抄)

うごき

五加木(名)

灌木の名。新芽の食用となるもの。

うごき

動(名) 動く事。●運動。

うごめく

蠢(自動四段) 「二」小虫類の少ゝづ、動く。

「二」鼻の少し動くやうに見ゆる。……高慢ぶる形容などに云ふ。

うゑ

餓。飢。餓(名) 飢うる事。●空腹。●饑餓。

うへ

上(名) 「一」高き處。●秀でたる物事。●上等。●上部。●上方。●上位。●表面。●外面。●

物事の既にある處へ他を又更に加ふる事。

「二」天皇。「三」男女に限らず。貴人の尊稱。

○「殿の上」「葵の上」「父上」「四」奥方の。

うへ

筥(名) 川魚を捕ふる具。細き竹にて編みたるもの。

うゑばうさう

植疱瘡(名) 天然痘を防ぐ爲に牛痘の膜を人體に移す事。●種痘。

うへえわらは

上童(名) 「一」禁中にて殿上人の召ま仕ふ童。「二」天皇の御前に伺候する童女。

うゑだけ

植竹(名) 植ゑある竹。(萬葉)

うへえぼね

上局(名) 天皇の御前近くに設けたる女御、更衣などの休息所。

うゑつく

植付(他動下二段) 植ゑ込む。●植ゑる。

うゑつけ

植付(名) 「一」植ゑ込む事。「二」特に稲を

うゑつき

植ゑ付くる事。●田植。

うへえなし

上無(形。形狀言ク活) 此上に並ぶ物なし。●比類なし。

うゑん

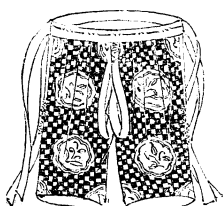
迂還(名) 廻り遠き事。△(形)―迂還なる。(又)迂還の。(副)―迂還に。

うえん

有縁(名) 佛法に縁のある事。△(形)―有縁の。○謡曲、有縁の衆生の諸願を叶へ」

うへえのはかま

表袴(名) 束帶の時。袍の下に着る袴。先づ大口の袴を下に着て其上に之をばく故に表袴と云ふ。ヒダなくして下部の方やうやうに狭くなりたるもの。(圖)



うへえのきぬ

表衣(名) 袍に同じ。

うへえや

上屋(名) 女官の局。●君の御前にての詰所。

うへえぶし

上臥(名) 禁裡に宿直する事。

うゑこむ

植込(他動四段) 植ゑて仕舞ふ。●植ゑる。

うへこみ

植込(名)

色々の草木を植ゑ交ぜたる所。●

前栽。

うゑき

植木(名)

庭園または鉢に植ゑたる木。

うゑめ

植女(名)

田植する女。●早乙女。

うへみやつかへ

上

上宮仕(名)

朝夕天皇の御前に伺候

して御用を勤むる事。又は其役人。(源氏)

うゑじ

植字(名)

活字。

うゑびど

飢人(名)

飢ゑたる人。(拾遺)

うゑびど

植人(名)

水草を植うる人。●植木屋。(今昔)

昔)

うへびど

上人(名)

〔一〕殿上人。〔二〕貴人。

うゑもん

右衛門(名)

ゑもんを見よ。

うゑもんふ

右衛門府(名)

ゑもんふを見よ。

うゑもん

植物(名)

〔一〕しよくぶつに同じ。草、木、竹などの總稱。〔二〕庭園または田畑に植ゑ付

け作りたる草木。

うて

討手(名)

うってに同じ。○大和「うての使」

うて

腕(名)

〔一〕臂より手首までの稱。●かひな。●

うで

腕(名)

たゞむき。〔二〕腕前に同じ。●技倆。

うでぬき

腕貫(名)

腕輪に同じ。

うでおし

腕押(名)

遊戯の名。臂を衝き立て掌を握り

合ひて押し伏せられたる方を負とするもの。

うでわ

腕輪(名)

高價なる金屬などにて作り腕に籍むる輪。

うでだて

腕立(名)

腕力三昧。○謡曲「似合はぬ僧の腕立さこそをかしく思すらめ」

うてな

臺(名)

〔一〕高殿。●樓。〔二〕植物の莖。すな

はち花瓣を載する臺。

うてん

雨天(名)

雨降の空。●雨の降る日。

うてのつかひ

討手使(名)

追討使。(大和)

うでぐみ

腕組(名)

腕と腕を合はす事。

うでまくり

(名)

着物の袖をまくりて腕を露はす事。

うでまへ

腕前(名)

手練。●手際。●伎倆。

うでまもり

腕守(名)

腕に纏ひて所持する守袋。

うでぎ

腕木(名)

建築上の詞。人の腕にて物を支ふる如く柱より斜に出して底などを支ふる様に

うでぎ

したる材。

うさん

胡藺(名)

茶の湯道具の名。茶碗の一種にして最も貴重なるもの。

うさん

胡藺(名)

茶の湯道具の名。茶碗の一種にして最も貴重なるもの。

うさん

胡藺(名)

茶の湯道具の名。茶碗の一種にして最も貴重なるもの。

うさん

胡藺(名)

茶の湯道具の名。茶碗の一種にして最も貴重なるもの。

うさん

胡藺(名)

茶の湯道具の名。茶碗の一種にして最も貴重なるもの。

うさん

胡藺(名)

茶の湯道具の名。茶碗の一種にして最も貴重なるもの。

うさん

胡藺(名)

茶の湯道具の名。茶碗の一種にして最も貴重なるもの。

うさん

胡藺(名)

茶の湯道具の名。茶碗の一種にして最も貴重なるもの。

うさん

胡藺(名)

茶の湯道具の名。茶碗の一種にして最も貴重なるもの。

うさん

胡藺(名)

茶の湯道具の名。茶碗の一種にして最も貴重なるもの。

うさん

胡藺(名)

茶の湯道具の名。茶碗の一種にして最も貴重なるもの。

うきどり

兎(名) 獸の名。耳長く前足短かくして山野に住むもの。又家に飼ふのもありて之を家兎又は南京兎とも云ふ。

うきうき

兎馬(名) 獸の名。形馬に似耳兎に似て丈低く極めて柔順なるもの。●驢馬。

うきうき

兎馬(名) うきうきに同じ。(夫木)

うきうき

設弦(名) 豫備の弓弦。(紀)

うき

泛子。浮(名) 釣糸に附くる木片。魚の餌を食ふ時は水面に浮びたる木片の沈むによりて之を知るやうに設けたるもの。

うき

蓋(名) さかづき。(記)

うき

泥。●沼。●ぬかるみ。(六帖)

うき

雨儀(名) 雨天には物事略式にする意より出て

うき

禁中諸儀の略式なるを云ふ。

うき

浮岩(名) 輕石。

うき

浮葉(名) 水上に浮びたる草葉。

うき

浮橋(名) 〔一〕神代の始め天地の通路にあり

うき

しさいふ橋。〔二〕水上に浮ぶやうに作れる橋。舟橋の類。

うき

浮彫(名) 彫刻の詞。模様を浮かして地を彫り込む事。

うきどり

浮鳥(名) 水上に浮び居る鳥。

うきぬ

(名) 泥沼。(好忠集)

うきぬは

浮蓐(名) 水上に浮び居る蓐。

うきおり

浮織(名) 模様を浮かせて織りたる織物。

うきよ

浮世(名) 〔一〕つらき世の中。●厭ふべき此世。

うき

〔二〕浮き漂ひたる世。●浮きくして定まりの無き世。〔三〕俗界。●世間。

うき

右京(名) 〔一〕平安京を二區に分ちたる其一部。朱雀大路より西部の稱。〔二〕右京職

の略。

うきやうしき

右京職(名) うきやうしきに同じ。

うきやうしき

右京職(名) 右京を管轄する役所。官

吏は大夫、亮、進(大、少)屬(大、少)坊、令

あり。

うきと

浮世繪(名) 〔一〕世間の風俗をかきたる繪。

うき

風俗。〔二〕繪畫の流派の名。現代の風俗人情等を主とするもの。岩佐又兵衛を祖

とす。

うき

(名) 泥田。

うき

泥土。●沼地。●ぬかるみ。(山家集)

うき

浮寝(名) 〔一〕鳥の水上に浮きて寝る事。〔二〕

うき

うき

船に寝る事。「三」波にぬれながら寝る事。

◎涙を川に見立て、自身が其川に身を浮ぶるの意。

うきな 浮名(名) 悪名。●悪評。

うきなみ 浮波(名) 浮き漂ふ波。(源氏)

うきうた 宇岐歌(名) 上古雅樂寮の歌曲の名。(記)

うきうき 浮々(副) 心の浮きたる有様。(又)「うき」く

こ。

うきくさ 萍。浮草(名) 水草の一種。葉は丸く小さくして根は土に着かず水上に漂ひ居るもの。

うきくも 浮雲(名) 浮きたる如く輕き雲。

うきまくら 浮枕(名) 浮寝の枕。(雅)

うきふね 浮舟(名) 波に漂ふ舟。(雅)

うきふし 憂節(名) 憂き事。●つらき事。……和歌に

は竹の節の意に言ひ掛けて用ふる事も多し。○古今「世にふれば言の葉しげき吳竹のうきふし毎に鶯の鳴く」

うきせ 浮木(名) 「一」水上に浮び漂ひたる木。「二」佛

書のご事。……浮木の龜を見よ。「三」舟。

うきさのかめ 浮木龜(名) 容易に遇ひ難き事の喩。阿

含經に曰く「大海の中に一盲龜あり。壽無

うきゆひ

量劫にて百年に一たび水面に出づ。一の浮木あり。唯一の孔ありて海内に漂流し浪に随ひて東西す。盲龜一たび出でて此穴に遇ひ頭を穿ち中に向はんを擬すれども。其木西に浮めば龜或は東に出づ。圍繞するも又然り。又差違すさいへども尙或は相遇ふが如し」

蓋結(名) 盃を取りかはす事。……互に和睦する時に云ふ。(記)

うきめ 憂目(名) 憂き事。●つらき事。

うきみ 浮身(名) 「一」つらき身。●苦痛のある身。「二」

はかなき身。●つまらぬ身。

うきみる 浮海松(名) 海面に浮び居る海松。

うきしま 浮島(名) 水上に浮び漂ふ島。草の根などの

上に土の積りて成りたるもの。

うきもん 浮紋(名) 糸を浮かして織りたる装束の摸

様。●うけおり。●うけもん。

うきせ 憂瀬(名) 憂き時。●憂き處。●憂き事。

うきす 浮巢(名) 水上に作りたる鳥の巢。

うきす 水に入れば浮く様に輕く作れる矢。

ういゅう 烏有(名) 火災などに罹りて少しも跡を留め

ぬ事。

うめ

梅(名)

「一」木の名。春の初め雪霜を侵して苔を破り夏の初め實を結ぶもの。花は色の清らかなるゝ香氣の高きを以て貴重せられ。

實は梅干となりて家々の食用に供せらる。「二」梅の花。「三」重の色目の名。表白、裏濃

き蘇枋。又表濃き紅。裏紅梅。

うめばち

梅鉢(名)

紋の名。梅の花の形したるもの。

うめぼし

梅干(名)

梅の實を鹽漬にして干したるもの。

うめがえ

梅枝(名)

「一」梅の木の子。「二」催馬樂の曲

名。

うめがね

梅重(名)

重の名。……うめの「三」を見よ。

うめつぼ

梅壺(名)

禁中六舎の一つ。凝華舎の異名。

うめつぼのせ

うしやんしう

梅壺少將(名)

古代物語の名。但し世に傳はらず。

うめつけ

梅漬(名)

梅酢に漬くる事。又は漬けたる物。

うめつき

梅月(名)

陰曆四月の異名。梅の實

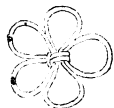
の熟する月の意。

うめむすび

梅結(名)

紐の結方の名。梅

の花の形したるもの。(圖)



うめく

呻(自動四段)

うなるに同じ。●呻吟する。

うめくさ

埋草(名)

「一」堀、川などを埋むる材料の草。

うめごろも

梅衣(名)

「二」すべて埋むる材料のもの。

うめき

埋木(名)

板などの一部分を他の木片にて埋むる事。

うめみづき

梅見月(名)

陰曆二月の異名。

うめもどき

落霜紅(名)

木の名。葉は梅に似て夏の頃

薄紅の花咲き秋の末に赤く玉の如き實を結ぶもの。

うめず

梅酢(名)

梅の實を鹽漬にして得たる汁。

うみ

膿(名)

腫物より出づる血の腐りたるもの。●膿汁。●のう。

うみ

海(名)

水の廣々を満ち湛へたる所。●陸地を包みたる水の大なるもの。

うみほづき

海酸醬(名)

螺の卵を云ふ。海中の石ま

たは流木などに幾つも並び着き袋の如き形したるもの。女子供など之を得て酸醬のやうに吹き鳴らし遊ぶ。

うみべ

海邊(名)

海のはざり。●海端。●海濱。●海岸。

うみち

海路(名)

海上の航路。●船路。

うみな

績亭(名) 績みたる亭。

うみわた

海綿(名) 海産動物の名。かいめんと同じ。

うみが

(名) 海。……陸(くわ)に對して云ふ。

うみがつき

(名) うむがつきに同じ。●臨月。

うみそ

績麻(名) 績みて糸にしたる麻。

うみつち

(名) 海路に同じ。

うみつら

海面(名) 海水の表面。●かいめん。

うみつぎ

産月(名) 出産の時期に當りたる月。●臨月。

●うむがつき。

うみのおきな

海翁(名) 海老の文字の直譯。◎はび〇

續詞花「人の大むねを尋れたるに無き程に

て十九やるまで 世の人は海の翁といふめ

れどまだ二十にも足らずでありける」

うみのつき

(名) 海月の文字の直譯。◎くらげ。〇夫木

「我戀は海の月を待ちわたるくらげも骨

に逢ふ世ありやさ」

うみのみやこ

海都(名) 龍宮城。

うみまつ

海松(名) 海草みるの一名。(土佐)

うみて

海手(名) 海の方。●海邊の方角。

うみさち

海幸(名) 海にての漁獲品。●海のぬもの。

(記)

うみぎは

海陸(名) 海邊。●海濱。

うみじ

産字(名) 他の音を産み出だす文字。●母音。

うし

牛(名) 「一」獸の名。體肥大にして脚細く角あり。

力の強くして柔順なるが故に飼ひて力役に

供す。其肉と乳とは滋養に富み。皮より骨

に至るまで悉く用途あり。人世に最も必要

なる家畜。「二」牛肉。

うし

丑(名) 十二支の一つ。……丑の時は午前二時。丑

の方角は。北と東北との中央。

うし

大人(名) 「一」神、君、親、師および貴人の尊稱。

「二」碩學大家の尊稱。

うし

憂(形。形狀言ク活) 憂ふべき有様。●つらし。●

かなし。

うじ

蛆(名) 虫の名。蠅の孵化したるもの。多くは汚

穢物に生ずる故虫類の中最も人に嫌はる。

うしろ

後(名) 前の反對。●背面。●後部。

うしろべたし

(形。形狀言ク活) うしろめたしに同じ。

うしろがろし

後輕(形。形狀言ク活) 跡に氣がりの

無き。●安心なる。

うしろかげ

後影(名) うしろ姿。

うしろだて

後楯(名) 「一」後の方の防ぎとする楯。

〔二〕後見。

うしろつき

後付(名) 後より見たる様子。●うしろ姿。

うしろむ

(自動上二段) 後見する。●世話を焼く。

うしろのみつじ

後三辻(名) 積鼻禪の後の三方出合

ひたる結目ないふ。●みつ(會我)

うしろぐらし

後暗(形。形狀言ク活) 跡が明に知られぬ。

うしろやすし

後安(形。形狀言ク活) うしろめたしの反對。安心なる。

うしろで

後手(名) 〔一〕うしろ姿。●うしろつき。〔二〕人を縛る時その手を後に廻さしむる事。

うしろあし

後足(名) 四足動物の後部の足。

うしろゆび

後指(名) 後の方に居て其人を指さす事。……嘲り笑ふ時などに云ふ。

うしろめたなし

(形。形狀言ク活) うしろめたしに同じ。

うしろめたし

(形。形狀言ク活) 氣がいらで有る。●不安心な。●心もさなし。

うしろみ

後見(名) 〔一〕後に居て世話を焼き助力する人。●こうけん。〔二〕妻。

うしろす

(自動サ變) うしろ向ける。○源氏「此草子

にうしろしたる人」

うしろすがた

後姿(名) 後より見たる姿。●後付。

うしはく

(他動四段) 其土地其場所を主とる。●主宰する。●領する。○萬葉此山をうしはく神の

うしどら

丑寅。良(名) 方位の名。丑の方と寅の方との中央にて東北をいふ。

うしほ

潮(名) 海の水。

うしほに

潮煮(名) 料理の詞。鹽のみにて味を付けたる吸物。

うしおふもの

牛追物(名) 武術上遊戲の名。大追物の類(今昔東鑑)

うしかひ

牛飼(名) 〔一〕牛を飼養する人。●牧牛者。〔二〕車に附く牛を使ふ人。●牛方。

うしかひぼし

(名) 牽牛星の異名。

うしかた

牛方(名) 牛を曳く人。●牛飼。

うしよつ

丑四(名) 丑三つを見よ。(狭衣)

うじやう

有情(名) 〔一〕情の有る事。〔二〕情の有るもの。人類以下すべて動物の總稱。(佛敎)

うせうべん

右少辨(名) 官名。……辨を見よ。

うしなふ^{ッリ}

失(他動四段) 「(一)無く爲す。(二)死なす。

うしん

有心(名) 「(一)心ある事。(二)氣もちを見する

事。●氣輕くなき事。●耻かしがる事。○枕

「さくいへ。あまりうしん過ぎてしをこなふな」

うしんじ

有心者(名) 心ある人。●情ある人。(雅)

うしのさきみり

丑時參(名) 「(一)神佛に深き祈願あ

りて丑の時に參詣する事。(二)特には女の嫉妬によりて憎しと思ふ人を阻ひ殺さん事を神佛に祈請するために參る事。

うしのくひ

丑杭(名) 昔し禁中にて漏刻に差したる丑

の刻の目印の杭。杭杭を境として今日と明日との日附を分くるなり。○辨内侍日記「夜は更けぬる。丑の杭の程かき問はせ給ふ」

うしのくるま

牛車(名) うしくるまに同じ。

うしのまへ

丑前(名) 丑の刻になる少し前。(空穗)

うしぐるま

牛車(名) 「(一)人の乗りて牛に曳かする

車。昔し貴人の外出には必ず用ひたるもの。●ぎつしや。●ぎうしや。●御所車。(二)牛に曳かする荷車。

うしふたつ

丑二(名) 丑三つを見よ。

うしごろも

牛衣(名) 牛に被する衣。

うしあはせ

牛合(名) 牛を闘はせて勝負を争ふ一種の遊戯。●闘牛。●牛の突合。

うしみつ

丑三(名) 丑の時を五つに分ちたる其第三に當る頃の時刻。夜中にて最も更け靜まりたる時……此刻にて他の時刻をも丑一つ丑二つ丑四つなど稱ふ。

うしひどつ

丑一(名) 丑三つを見よ。

うしひくはな

(名) 牽牛花の文字の直譯。●朝顔の花。○一條兼良「野邊の千草を今日のため。手折り持て來て瓶にさし。牛牽く名ある花をさへ女郎花とぞ合はせける」言繼卿集「百草のあるが中にも彦星の牛牽く花を手向とやせん」

うしひくほし

(名) 牽牛星の文字の直譯。(謡曲)

うじもの

鵜白物(副) 鵜のさまに。●鵜の如く。○祝詞式「うじものうなれつきぬき」

うひや^{ヒヨ}うあ

右兵衛(名) 右兵衛府の略。

うひや^{ヒヨ}あふ

右兵衛府(名) 左兵衛府と並び立ちて禁中を護衛する官廳。官吏は督、佐、尉、志、府生あり。

生あり。

うびたひ

兎額(名) 馬の毛色の名。額の白きもの。(和名抄)

うも

芋(名) いもの古名。(萬葉)

うもる

(自動下二段) 埋められてある。●うづもるい。

うもれいたし

(形。形状言ク活) 氣の鬱したる有様。●沈鬱な。●幽鬱な。●いぶせし。○源氏「若き人のめでざらんもいさあまりうもれいたからん」

うもれぎ

埋木(名) 「一」土中或は水底に埋もれて朽ち残り居る前世世界の植物。「二」森の中に埋もれてありと知られぬ木。「三」古代物語の名。但し世に傳はらず。

うもれみ

埋身(名) 埋もれて有りとも人に知られぬ身。(能宣集)

うもれみつ

埋水(名) 草などの下に埋もれて有りとも人に知られぬ水。

うす

白(名) 杵にて穀物、餅味噌などを搗く器。●搗白。

うす

碓(名) 穀物などを粉さなす器。●挽臼。●磨臼。

うす

薄(形) 薄き。○「薄曇」「薄着」

うす

失(自動下二段) 「一」形の無くなる。●見ぬ様

うす

雲珠(名) 「一」模様の名。雲の形を丸く畫がけるもの。(圖)(二)

雲珠鞍の略。



うす

髻華(名) 上古貴人の冠の上に挿みたる裝飾品。本草の枝(花又ハ葉)または造花などをも用ふ。今の女の挿す花簪の類。

うすいろ

薄色(名) 「一」何にても其色の薄き事。「二」染色の名。薄紫。「三」又染色の名。薄き二藍。「四」重の色目の名。表、赤みを帯びたる薄縹、裏、薄紫。

うすろぐ

(自動四段) 薄らぐに同じ。

うすば

薄及(名) 庖丁の一種。又の薄きもの。

うすはた

薄機(名) 薄き機物。●薄き織物。●羅。(六帖)

うすはなざくら

薄花櫻(名) 櫻の一種。薄色の花咲くもの。

うすはく

(他動四段) うしはくと同じ。○祝詞式「山河の清き處に還りいでまして我處さうすはきいませさ」

うすべり

薄縁(名) 産に縁を附けたるもの。●縁付産。

うすちや

薄茶(名)

挽茶の一種。薄く湯に入れて飲むもの。……濃茶に對していふ。

うすめりをぼし

薄塗烏帽子(名)

漆を薄く掛けて塗るたる梨子打烏帽子。(長門本平家)

うする

(自動下二段)

薄くなる。

●薄らぐ。○夫木「今日よりは葦間の水やゆるからん田鶴の立ち」

うすわた

薄綿(名)

綿の薄く入りたる衣。(宇治)

うすわらふ

ロウリ

(自動四段)

少し笑ふ。●微笑する。(宇治)

うすかはり

薄皮(名)

薄き皮。●膜。

うすがみ

薄紙(名)

薄き紙。

うすがすむ

薄霞(自動四段)

薄く霞む。(雅)

うすやう

薄様(名)

薄葉に同じ。

うすえふ

薄葉(名)

紙の名。薄くして質滑かなるもの。又薄様にも書く。

うすただみ

薄帖(名)

疊の一種。今いふ薄縁の類。(延喜式)

うすぞめ

薄染(名)

薄色に染むる事。

うすぞめころも

薄染衣(名)

薄色に染めたる衣。(萬葉)

うすつて

春(自動四段)

「一」白を春く。「二」夕日の山の端近く懸かりて將に入らんとする。

うすら

うすらかに同じ。(形)うすらなる(副)うすらに。

うすらひ

薄氷(名)

薄く結びたる氷。(雅)

うすらか

薄き有様。

●うつつり。△(形)うすらかなる。(副)うすらかに。

うすらぐ

(自動四段)

薄くなる。

うすらころも

薄衣(名)

薄き衣。(好忠百首)

うすうた

白歌。確歌(名)

白を搗く時又は確を挽く時に謠ふ歌。

うすのたまかけ

髻華玉蔭(名)

髻華に懸けたる日蔭

うすくら

雲珠鞍(名)

鞍の一種。雲珠の飾したるもの。

うすぐらし

●唐鞍。

薄暗(形。形狀言ク活) 少し暗くある。

うすぐも

薄雲(名)

薄く棚引く雲。

うすげし

薄化粧(名)

薄く白粉を附くる事。

うすころも

薄衣(名)

「一」うすぎぬ。「二」薄着。

うすこほり

薄氷(名)

薄く結べる氷。

うすこうばい

薄紅梅(名)

「一」薄紅の花咲く紅梅。

〔一〕色の名。薄紅梅の花に似たるもの。

うすて

薄手(名) 〔一〕陶器などの薄き作り方。〔二〕薄き手傷。●微傷。●輕傷。

うすざくら

雲珠櫻(名) 櫻の一種。花の莖に又小さき花の如きものを附くる一重櫻。

うすざくらもえぎ

薄櫻萌黃(名) 重の色甘の名。表薄青、裏櫻色。

うすぎ

薄黃(名) 色の名。黄色の薄きもの。

うすぎ

薄着(名) 衣類を通常より少なく着る事。

うすぎり

薄霧(名) 薄く立ちたる霧。

うすぎぬ

薄絹(名) 紗の類の薄き絹織物。

うすぎぬ

薄衣(名) 薄絹にて作りたる衣。昔し貴女なごの外出の時被りたるもの。

うすゆき

薄雪(名) 薄く降り積りたる雪。

うすみの

薄美濃(名) 薄く抄きたる美濃紙。

うすし

薄(形。形狀言ク活) 厚からず。●濃からず。●深からず。

うすべ

薄豹(名) 全體白くして下の方に斑點のある矢の羽。

うすびたひ

薄額(名) 磯の高からぬ冠。……厚額の對。

うすもの

羅。薄物(名) 薄くして透き通る如き織物の

うすく

總名。●薄絹。●薄機。(自動四段) 忙がはしく立ち走る。○源氏「御門守さむげなるげはひうすいき出で來てこみにもえ明けやらす」

うすまる

(自動四段) 群集する。(記)

うすみ

薄墨(名) 〔一〕色の名。墨の薄き色。●鼠色。〔二〕薄墨紙の畧。

うすみがみ

薄墨紙(名) 〔一〕紙屋紙の一名。又宿紙とも云ふ。〔二〕引合紙の一名。

うすみの

薄墨の(枕) 夕の枕詞。薄暗なる時刻故に云ふ。

うすみのりんじ

薄墨繪旨(名) 薄墨紙に記されたる繪旨。昔は口宣などには之を用ひたる故に云ふ。